35
249

始

35
549

新知識叢書

第八編

人種改造學

高畠素之譯

東京 實業之世界社 發行

新知識叢書

第八編

人種改造學

高畠素之譯

大正
4. 10. 23
内交
全

東京　實業之世界社發行

注意

本叢書第一編を發行するに當り、題して『最新知識叢書』とせしも『最新』にては餘りに範圍狹小なるを以つて、第二編以下、單に『新知識叢書』と改むることとしたり。

新知識叢書發刊の辭

一國の文明の程度を計る標準は、其國の天才の頭數でなくして、國民全體の知識の平均點である。即ち知識の普及である。天才をして輩出する機會を得せしむる力は、實に知識の普及である。國民が天才の事業を理解して、其重んずべき所以を知る所に天才が輩出する。日本人は、軍人の事業を理解して、之れを重んずるが故に、軍事上の天才が輩出する。歐米人は、科學者の事業を理解して之れを重んずるが故に、誇るに足る科學の天才の多數を有して居る。若し日本が、科學に於いても、文學に於いても、製造工業に於いても、歐米諸國と拮抗しようとするならば、先づ國民全體が、是等の事業を理解して、其の價値の存する所を知らなければならぬ。天才は、國民の理解と敬重とを肥料として發育する喬木である。

而して、天才が知識の平均點を高める度合、即ち文明進歩の率は國民の知識の程度に正比例をなす。例へば、ラヂウムを應用し得る學者五人を有する國と、十人を有する國との進歩の比は、五と十との比に等しい。日本人が、歐米人と同じ速度を以つて進歩しようとするならば、先づ歐米人の知識の平均點に達しなければならぬ。

此の方面に於ける日本人の努力する傾向は、頗る顯著であるが、併し、十分であるとは言ひ得ない。此の傾向を助長することは、極めて緊要の事である。本社が『新知識叢書』を發刊する目的は、實に日本人の知識の平均點を歐米人と同等ならしめんとするにある。天才の爲めに肥料を施し、文明の進歩の爲めに、道路を作らんとするにある。日本をして、軍事以外に於いて一等國たる實を有せしめんとするにある。

實業之世界社

人種改造學（目次）

第一章　緒論……一
第二章　進化と遺傳……一五
第三章　メンデル説……二七
第四章　才能の遺傳……四〇
第五章　結核病、躁狂、痴呆、瘋癲……五一
第六章　境遇の影響……六七
第七章　淘汰働因……九七
（一）相對的出産率と死亡率
（二）特殊の原因に依る淘汰的死亡

目次終

第八章　人種改造學的政策……一三五
（一）婚姻法及び婚姻習慣
（二）性能削除
（三）淘汰的結婚率と雌雄淘汰

人種改造學

高畠素之

第一章　緒論

凡そ人事の指導に就いて一の新らしき政策を提唱せんとする者は、先づ其政策に依つて實現せらるべき目的如何を明白に意識する必要がある。啻に目的を意識するのみならず、彼等は更らに進んで、其目的の眞に望ましきものであること、併びに自己の提出する手段が、其目的を實現する爲の方法として眞に確實有効のものであることを説明し得るの用意が無くてはならぬ。然らずんば、彼等は到底自己の政策

に對して多數人の贊成を博することは出來ぬ。世には人種改造學の目的をば、單に國民の商業的及び戰鬪的能率の增進と云ふが如き、極めて狹隘なる範圍に局限せんとするものがある。然しながら、我々が人種改造學を主張するのは、決して斯くの如き愛國的の意義に於いてゞはない。我々は寧ろ人類幸福の增進に對する一個の方法として、少くとも幾多の不必要なる慘事に對する一個の防遏手段として是を推薦し度いのである。

勿論、醫術、衞生、教育等も、根本に於いては矢張り人類幸福の增進と云ふことを目的としてゐる。彼等は此目的に到達する爲の手段として、各個人が自己の肉體的及び精神的性質に存する最良分子を十分に發揮して、自らも滿足し、社會全體にも有利であるやうな生活を送り得る如き結果を來さしめんと努力する。

然るに此の『各個人の性質に存する最良分子』なるものは、今日に於いては、多

くの場合まだ極めて貧弱である。そこで、人種改造學は此極めて貧弱なる最良分子をば今少し豐富ならしめんと努めるので、此點が人種改造學と他の醫術、衞生、教育等と異る所である。人種改造學は之等の諸技術よりも更らに一層根本的である。

と云つて、人種改造學は決して之等の諸技術に取つて代らうと云ふのではない。人種改造學の眞の努力は寧ろ之等の技術の足らぬ所を補はんとする點に存するのである。人種改造論者は無論、一定の宗派や黨派を築いて居る譯ではないが、然し彼等は暗々裡に一個の共通信條を把持して居るやうに見える。夫は人間各自が母胎を出てから死の門を潛るに至るまでの各瞬間に於いて受くる所の能動的性質は、總て皆な左の二原因の相互作用に依つて生ずると云ふ信條である。即ち一、發達に對する本有的伏能力、二、境遇、即ち人生の精神的、道德的及び物質的周圍。

本有的伏能力は、或は人體の物理化學的構造に基く所の物質的力であるかも知れ

ぬ。或は又た、自然科學に依つては到底窺知することの出來ぬやうな神祕的性質のものであるかも知れぬ。何れにしても、我々は其窮極的性質に就いて一定の意見を立てる必要はない。只だ此の本有的伏能力の大部分が、兩親乃至祖先固有の性質より得られたものであると云ふ事に就いては、恐らくは何人も異存があるまいと思ふ。而して之が即ち遺傳の眞の意義である。勿論、我々人間は心身の表面に現はれた儘の能動的性質を觀察し得るのみであつて、到底個々の場合に於ける伏能力の委曲を測知することは出來ぬ。隨つて、遺傳の外部的發現なるものは、要するに兩親と子女、祖先と子孫との間に於ける此の能動的性質の類似に外ならぬのである。而して本有的伏能力は一般に『自然』と呼ばれ、本有的伏能力に作用して、之を我々が認識し得るやうな性質に發現せしむる所の境遇は、一般に『營養』と呼ばれて居る。此の兩語は勿論十分に精確とは云へぬ。それに今日では全く平凡なる通語に墮

した傾はあるが、然し之に代る程の適語もないので、私は矢張り上に述べたやうな意義で此兩語を使用して行かうと思ふ。

以上は要するに一個の信仰としての、寧ろ一個の理想としての人種改造學を概說したのであるが、然し之だけでは未だ到底人種改造學を一個の實際的政策として採用する譯には行かぬ。蓋し人種改造學は一個の信仰としては稍〻不明の嫌がある。で、之を眞の實際的政策に具體化するには尙ほ今少しく其概念を明確ならしむる必要がある。玆に於いて初めて、科學としての人種改造學の必要なる所以が生じて來る。

フランシス・ガルトンは科學としての人種改造學は、『將來子孫の人種的性質をば或は肉體的に或は精神的に改善乃至毀害する所の、社會的統御の下に在る諸働因を研究する』ものだと云つた。『社會的統御』の一語は、蓋し人種改造學の實際的立場

を閑却せしめない爲の注意として加へられたものであらう。即ち人種改造學の眞の目的は、社會的統御を人種改善のために應用する所の方法を發見するに在る。然し茲に注意すべきことは、我々は餘りに此定義に即し過ぎて、我々の研究をば只だ我々が社會的統御の下に在ることを知る所の諸働因のみに局限してはならぬと云ふことである。夫でないと、研究の完了された後でなければ、我々は果して如何なる自然法乃至社會關係が、人間團體の個人意思なり集合意思なりに依つて意識的に統御され得るものであるかを知ることが出來ぬ。

世には科學としての人種改造學なるものは無いと主張する人がある。然し、之等の人々は恐らく、人種改造學と云ふ言葉を一種獨特の意義に解釋して居るのであらう。

或は又た最近、人種改造學に就いて公にされた著書論文の説明を無視して居るの

であらう。普通の辭書は特殊科學を定義して『組織立てられた特殊の知識部門』と云うて居る。けれども由來、科學は死物ではない、絶えず變化し、絶えず發達しつつあるものである。然るに上記の定義は生きた科學の特徴として最も大切なる此の發達及び變化の概念を無視した傾がある。故に、單に知識を組織立てると云ふのみでは未だ不十分である。如何なる點に新らしき材料を要するか、又た如何にして其新らしき材料を獲得すべきかを摘示し得るやうに組織立てられた知識でなくては科學とは云へぬ。此意味に於いて、人種改造學も亦確かに一個の科學と目すべき理由がある。蓋し、人種改造學に關する幾多の事實、推究、假定等は、最早既に一個の秩序ある組織に配列された。我々は既に人種改造學に關して明確に限定せられたる幾多の問題を有して居る。之等の問題を手引として、我々は更らに更らに研究の歩を進めて行かねばならぬ。本書の目的は要するに、紙面の許す限り、之等の事實、

推究、假定等を細叙し、紙面の許す限り十分に之等の問題の性質を明にするに在る。そこで我々は先づ一通り、本書の取扱ふべき諸問題を檢閲して置き度いのである。

其問題の第一は遺傳である。辭書の定義に依ると、遺傳は子女に對する父母の性質の傳統だとある。此の父母の性質の傳統と云ふことに就いて二個の問題が生じて來る。即ち第一は、如何なる程度に於いて又如何にして此傳統が行はれるか、又其傳統せらるべき性質如何と云ふ問題であつて、第二は、如何なる作用に依つて此傳統が行はれるかと云ふ問題である。

言ふ迄もなく、遺傳は人種改造學の組成分子中第一位を占むるものである。蓋し、將來子孫の人種的性質を改造する所の働因としては遺傳が最も有力である。我々は遺傳を前提せずして生殖を考へることは出來ぬ。又た生殖を前提せずして將來の子

孫を考へることは出來ぬ。英語のレプロダクションを我々は生殖と譯すが、レプロダクションの本來の意義は再生である。即ち同一物の再生産と云ふことである。此意味に於いて、生殖は即ち遺傳だとも云へる。尤も普通、遺傳される性質として我我の注意を引くのは、一種屬若しくは一變種の共通性質でなくて、傳統する個體と傳統される個體との示す特殊の性質である。此の特殊の性質の傳統が即ち遺傳だと我々は解してゐる。遺傳としては、正にさう解するが至當であるが、然し實際傳統されるのは必ずしも父母と子女との特殊の性質のみとは限らぬ。種屬共通の性質も亦傳統される。然らずんば、生殖は再生でなくて創造である。

次に營養の問題が來る。此問題は結局次の一事に歸する。即ち、異れる營養が同一の性質に作用した場合、如何なる程度まで性質の變異が誘起されるかと云ふ問題である。此の問題は今の所到底十分に之を解決することは出來ぬ。然し、人種改造

學は必ずしも此問題の完全なる解釋を必要としない。只だ、各個人の容貌、習慣、知識、健康、道德等が著しく營養の影響に由來すると云ふ一事だけは、是非とも之を明にして置く必要がある。次に、營養の（即ち境遇の）影響は、果して子孫に傳統されるやうな變異を與へるものであるか何うかと云ふ問題が生じて來る。例へば飲酒のために兩親の性質に與へられた變化は、果して子孫に傳はるや如何と云ふ問題が之である。

次は淘汰の問題である。由來、遺傳が變化を齎らすのは、各種の人種若しくば階級に增殖率の差異あるが爲めであつて、總ての人種、總ての階級が悉く同一率を以て增殖を遂げて行つたなら、遺傳が將來の子孫に及ぼす所の影響は殆ど皆無に歸するであらう。然るに、玆に一種の淘汰作用が行はれて、或る種の人種なり階級なりが、他よりも幾分か高率を以て增殖すると云ふことになれば、玆に初めて遺傳は人

類の運命を左右する所の動力となるのである。然らば斯く人類の運命を左右する所の淘汰働因とは果して如何なるものであるか。我々は、社會的習慣であらうが、經濟的壓迫であらうが、其他如何なる出來事であらうが、總て人類の影響を及ぼして、特種の人種、階級、團體の增殖率に變異を生ぜしめるやうな傾向、出來事、關係等を淘汰働因と稱ぶ。而して之等の淘汰働因中最も重要なるは出產率の差異である。

一人種の出產率と死亡率との差は、直ちに其人種の增殖率を示すものと云うて差支ない。但し、之は移住の影響を全然無いものと見た上の斷言である。而して生產率の高低は、主として結婚する人々の割合、一夫婦の間に生れる子女の平均數、人間一代の期間の長短等に依つて定まるのである。斯くして生じた出產率の高低は、一國民の增殖率に變化を生ぜしめることもあらうし、又た一國民內の各種の階級、宗派、人種的團體等の增殖率を動かすこともあらう。或は更らに、一團體、一階級

中の特殊の性質を有する個人の增殖率に變動を與へることもあらう。又た階級に依つて出産率を異にすると云ふ事實もある。例へば、上流階級は下層階級よりも遙かに出産率が低いと云はれて居る。其眞僞は暫らく別として、假りに之が確實な事實であるとした場合、其の人種改造學的價値を定めんとせば、我々は先づ上流階級の人々に、果して遺傳し得るやうな心身の卓越性が在るか何うかと云ふことを明にする必要がある。又た舊教徒は一般に新教徒よりも出産率が高いと云はれて居る。果して之が事實であるとすれば、我々は先づ彼等の信仰の差異が全然偶然のものであるか、乃至は彼等の知的・感情的本有性質の差異に基くものであるかを明にする必要がある。

死亡率も亦出産率と同じく、一個の重要なる淘汰働因を成すものである。例へば、嬰兒の死亡率の高いのは、一般に虛弱者を除去する所の力として、人種の健康を增

進する所の有力なる原因と看做されて居る。之に反して、戰爭は强壯者の死滅を招くものであるから、戰爭に依つて死亡率の高まる毎に、國民の健康は減退する譯である。之等は總て、死亡率の高低によつて淘汰の行はれ得る事を證明するものであるが、尙ほ、或る種の階級團體に限つて結婚を奬勵したり禁止したりするやうな習慣も亦、其の階級が何等かの點に於いて他の一般階級と異つて居る限りは、矢張り一種の淘汰的働因と看做して差支ない。例へば英國の軍隊には飛行將士の結婚を禁ずると云ふ規定があるが爲に、彼等の卓越性は子孫に傳はらぬ。又た曾て牛津、劍橋兩大學に於いては、特待生たるの權を獨身者の間のみに制限したことがある。其ほか彼の舊教僧侶の獨身主義なども、矢張り一種の淘汰働因である。

次に、人類の幸不幸に至大な影響を及ぼす所の特殊の性質、例へば特に卓越せる才能、技倆とか、白痴、瘋癲、結核とかの性質が、果して何の點まで自然に負ふて

居り何の點まで營養に負ふて居るか、又た之等の諸性質の或る原因が生得のものである場合、如何にして、又た何の點まで夫が遺傳に依つて傳統されるかと云ふ問題が生じて來る。

最後に今一つ、最も重大な問題が殘つて居る。夫は法律、習慣、經濟等の諸働因と人種改良との關係である。此點に於いて、私は特に人種改造學的の立法、即ち人種の改造を助成するやうな法律の制定を主張し度いのである。斯種の立法は恐らく多くの人々からは、人種改造論者の手前味噌として排斥されるかも知れぬ。之等の人々に向つては、私は特に、人種改造學の理想を採用することは、決して一定の政策に固執することでも無く、又た一定の傳道に贊成することでも無いことを斷言して置き度いのである。

第二章　進化と遺傳

遺傳の最も普通の表現は、父母の性質が又た屢々子女に再現すると云ふ事實である。子供は親に似ると云ふが、親ばかりでなく、祖父母にも似れば、祖父母よりも更らに遠緣の直系先祖に似ることもある。或る點に於いては、伯父伯母乃至その他の傍系親族に似ることもある。但し、玆に特に注意すべきことは、我々に實際觀察することの出來るのは、決して或る特殊の性質の傳統と云ふ事實でなく、寧ろ同一家族に屬する二人の個體が此特殊の性質に就いて互に似て居ると云ふ事實である。而して、此の互に似て居ると云ふ事實の說明として提出された假定が即ち遺傳說である。

遺傳研究の取扱ふべき問題に二つある。一は記述的の問題であつて、他は生理學的

の問題である。我々は遺傳を研究する場合に先づ事實の明確なる考察を行はねばならぬ。即ち、如何なる性質が、如何にして、又た如何なる程度まで傳統されるかを考察する必要がある。次に、我々は此傳統の事實の根柢に横はる所の仕組作用の性質を極めなければならぬ。勿論、此の二つの問題は實際には斯く明白に分れて居る譯でなく、寧ろ同一問題の兩面と見るが至當である。蓋し、事實の知識は仕組作用の性質を發見する爲の唯一の手引であると同時に、仕組作用の性質を理解することは事實の考察に對する最も有効なる手段である。

今日まで遺傳の仕組作用を説明するために提出された學説は隨分あるが、然し首尾よく『時』の試驗に及第して事實上今日殆ど總ての生物學者に依つて採用されて居るのは、僅かに『胚種細胞の繼續』説あるのみである。此説は今より三十年程以前、アウグスト。ワイズマンに依つて初めて唱導されたものであるが、委曲は別

として其根本は今日殆ど總ての生物學者に依つて採用されて居る。人種改造學の研究には、此學説の委曲は別に知る必要はない。我々は只だ其根柢を理解すれば良いのである。

凡そ動物にしろ植物にしろ、其成熟した個體の要素を成すものは胚種であつて、此胚種は更らに胚種細胞を材料として造られるものである。而して、一定の胚種から將來如何なる種類の動植物が生じ來るかは、全く此の胚種細胞の性質如何に依つて定まるので、單に其動植物の屬する種屬乃至變種に特徴を與へる所の廣義の差異に關してのみならず、又た其動植物個體の特徴に關しても、其根本は矢張り胚種細胞の性質に依つて決定されるものと見て差支ない。

生物が胚種細胞の小塊の成長と分化とに依つて發達をつゞけて行く間に、其小塊の一部は分れて別個の存在をなすに至る。此分れた部分も矢張り他の部分と共に成

長發達はするが、然し其性質は何時までも最初の儘を維持して居る。此部分は勿論身體の中に生き、身體の中に於いて成長を遂げるけれども、決して身體の固有の部分を成さず、專ら次代の個體に對して胚種供給の勞を執つて居る。斯くして供給された胚種は更らに又た胚種細胞を造り、夫が更らに新たなる胚種を次の代に送つて無限に此行程を續けて行くのである。動物の主なるもの、又た動物程ではないが植物の主なるものも、大抵は兩性生殖に依つて增殖を遂げてゐる。即ち彼等の胚種細胞は半は父親に依つて、半は母親に依つて供給されて居る。此事實は前記の胚種細胞繼續說を著しく錯綜させるが、然し此說の根本性質は決して斯くの如き事實に依つて左右されるものではない。尙ほ此問題に就いて、我々は次の如き假定を立てることが出來る。即ち、兩性生殖を營む所の動植物の身體は、其何れの部分を問はず總て皆な二重に胚種細胞內に潛在し居るべき筈であると云ふ假定である。之に

依つて我々は更らに、胚種細胞內に潛在して居る所の性質は事實上必しも總て固有の身體に發達するを要しないと云ふ假定を立てることが出來る。

隨つて、固有の身體に事實上存在して居る所の性質と、胚種細胞に潛伏的に存在して居る所の性質とは、是非とも之を嚴別して考へねばならぬ。ワイズマンは前者を『身體性質』と稱び、後者を『胚種性質』と稱んだ。但し此後者の眞の性質に就いては、我々は今の所まだ何等纒つた知識を有して居らぬ。例へば一個の顯微鏡的胚種細胞粒が或はカントとなりヘーゲルとなりダアヰンとなり、或は猫となり鼠となり蚤となり虱となるのであるが、夫は果して胚種細胞粒の化學的組織の差異に依るのか、或は其組成分子の構造配合の差異に依るのか、乃至は又た其組成分子相互の運動關係の差異に依るのかと云ふ問題が起る。斯くの如き問題に對しては、我々の今日の知識では到底十分の明答を與へることは出來ぬ。斯くの如き明答は遺傳を

完全に理解する爲には必要であらうが、夫が與へられぬからと云うて胚種細胞繼續說が受入れられぬと云ふ理由はない。元來生物學者がこの說を尊重する所以は、之に依つて遺傳の或種の現象が單純に說明されるから許りでなく、進化の事實の說明として提出された二個の重要なる假定に對して此說が極めて緊密の關係を有して居るからである。

其假定の一はラマルクの進化說である。ラマルクは其著『動物哲學』に於いて次の三假定を提出した。即ち一、自然發生の作用に依つて最も單純なる有機體が造られること。二、斯くして造られた單純有機體は更らに境遇の直接影響を受けて各種の下等動植物を發生せしむること。三、動物の境遇の變化すると共に、其習慣も亦之に應じて變化すること。四、一定の習慣は又た必ず一定の機關の頻繁にして規則的なる使用を召致すること。而して斯く頻繁に規則的に使用される機關は益ゝ發

達するが、之に反して其習慣の爲に不用に歸した機關は益ゝ萎縮するので、之が遺傳の働に依つて機關の向上的發達と向上的萎縮とを召致すること。例へば、麒麟の首の長いのは絕えず首を伸ばして木の葉を食む習慣の結果であつて、蛇の足のないのは絕えず雜草の間を紆行する習慣から生じたのである。

然し胚種細胞繼續說から云へば、麒麟の胚種細胞は彼等が草食を初める以前に既に其身體細胞から分離したものと見做さねばならぬので、彼等が絕えず首を伸ばして木の葉を食む習慣が、如何にして其胚種細胞に影響して長き首の子孫を生ぜしめるに至りしか、說明することの出來ぬ以上、我々は到底この說を採用する譯には行かぬ。此點に於いて私は寧ろダアキンの自然淘汰說を取る。私が最に二個の重要なる假定と云つた、其假定の一は即ち此の自然淘汰說である。全體・動植物は非常なる急速力を以て增殖を行ふもので、象は增殖力の最も緩漫な動物と云はれて居る

が、夫でも一夫婦の間から七百四五十年間に生ずる子孫は無慮二千萬近くに上ると云ふ。蠅などになると一夫婦で六七百年間に殆ど地球の半を覆ふに足る程の子孫を造る。然るに實際地球上に生存してゐる所の動植物は、百年後も百年前も其數に於いて殆と差異のない所を見ると、他に何等かの原因があつて絶えず此急激なる增殖率を制遏して居るものと解さねばならぬ。其原因の一は食物の缺乏と云ふことである。即ち需用者の多い割合に食物の供給が少ないと云ふことである。そこで同一の食物を需用する所の生物の個體乃至種屬間に激烈なる生存競爭が起る。其結果は云ふ迄もなく優勝劣敗である。夫から又た食物になる方の生物の間にも、成るべく敵の爪牙を逃れやうと云ふ競爭から一種の優勝劣敗が行はれる。けれども、如何に生存競爭が激烈だからと云ふても其競爭者の間に精神上、肉體上の差異がなく、何れも同一の體力と同一の動作と同一の智力とを以て戰ふと云ふことになれば、其勝敗

は全く偶然の支配する所となれば、少くとも同一種屬の個體間の競爭に於いては優勝劣敗の行はれる餘地がなくなる譯である。然るに生物の個體は、何れの種屬を取つて見ても皆な何所かに多少の差異がある。此差異が即ち優勝劣敗の原因となるのである。即ち、競爭上有利なる特徵を有する個體が勝つて、競爭上不利なる特徵を有する個體が敗けるのである。

然し、如何に優勝劣敗が行はれても、一方に遺傳の働きがなければ、優者の特徵は一代切りで亡びて了ふ譯であるから、其特徵は何時まで經つても向上的發達を遂げない、故に、競爭と、個體間の差異と、個體的特徵の遺傳との三拍子揃つて初めて進化が行はれるのである。

此ダアヰンの自然淘汰説は、胚種細胞繼續説の立場から觀れば、遙かにワイズマンの機關使用説に優つてゐる。何故と云ふに、機關使用説に據ると、境遇に依つて

身體に與へられた變化が、更らに胚種細胞に影響して同樣の身體變化を子々孫々に傳へて行くと云ふことになるが、自然淘汰說は最初に胚種細胞の變化を假定し、其假定から出發して進化の事實を說明するからである。

次に、此の胚種細胞の變化の起原如何と云ふ問題が生じて來る。之に就いて、ライド博士は胚種細胞にも亦自然淘汰の作用が行はれると云ふた。蓋し、變化性ある胚種細胞を有することは、單にそれだけでも既に個體のため（少なくとも種屬のため）非常に有利な條件と云はねばならぬ。何となれば、斯くの如き胚種細胞を有することは淘汰的順應の行程を促進するからである。然し此說では變化の發達は說明されるかも知れぬが、變化の起原その者は到底說明されない。

自然淘汰に依る進化は、徐々に不斷に行はるゝ幾多の小變化の累積の結果だとダウキンは信じて居た。尤も彼は、モンストロシチイ（怪異）と云つて或る點に於い

て著しく他の同類と異る所の個體が屢〻現出することも認めてはゐた。然し彼の說に據ると、斯くの如き顯著なる變異は、假令その個體のために有利であつても、又た一時は保存されることがあつても、大抵は皆な普通の個體との交配に依つて消滅に歸するのである。然るに、此問題に關して近頃又た一種の新說が現はれた。此說に據ると、個體的の差異には比較的顯著なのと餘り顯著でないのとの二つがある。前者はミューテーション（變化）と云はれ、後者はフラクチュエーチング、ヴリアビリチイ（波動變性）と云はれて居る。而して眞に遺傳されるのは此前者のみであつて、後者は通常遺傳されぬものと見做されて居る。然し何れの變化が遺傳されるにもせよ、自然淘汰が絕えず出產率の差異を釀成して、一定の性質を有する個體の相對的增殖を可能ならしめると云ふ事實は動かない。此出產率の差異なるものは主として死亡率の差異に基因するのであるが、結婚率の差異も亦大に之に影響する。

而して此結婚率の差異は又淘汰の一形式なる雌雄淘汰の働に依つて動かされる場合が多いのである。

ラマルク説とダアヰン説との大體は右述ぶる通りであるが、尙ほ此兩説と人種改造學との關係に就いて一言して置き度いことがある。人種改造學なる觀念は元來自然淘汰説の產物である。我々は淘汰の力の偉大なるを見て、是非とも之を我々の幸福のために利用し度いと云ふ氣になる。然るに、自然淘汰を人間のために利用すると云ふことになれば、夫は既に自然淘汰でなくて人爲淘汰である。人類を人爲淘汰に依つて改造し、完全なる心身の人種を造り出さうと云ふのが人種改造學の眞の理想である。然るに人種改造論者中には又た境遇の改良のみに重きを置く一派がある。彼等は曰く、人類の進步は只だ生活事情の改喜に依りてのみ行はるゝものであると。私は斯種の人種改造論者をラマルク派人種改造論者と稱びて、他のフランス、ガルトンを祖述する所のダウヰン派人種改造論者と區別したいのである。

第三章　メンデル説

輓近遺傳研究は二個の異れる道に沿ふて躍近して來た。一はフランシス・ガルトンの提唱に懸る事實の計統的概括を主とする所の方法であつて、他は動植物の雜種の實驗的養成を主とする所の方法である。而して此第二の方法を初めて遺傳研究に應用したのは墺太利の僧侶グレゴール、メンデルであつた。

グレゴール、ヨハン、メンデルは一八二二年墺領シレシアに生れた。彼は一八四三年アルトブリユン僧院に入り後暫く其處を去つてヴイエンナに至り物理學と自然科學とを學んだ。其後ブリユンで暫く學校教師を勤めたが、後再びアルトブリユン僧院に聘かれ遂に其長に任ぜられた。彼は一八八四年世を去つた。

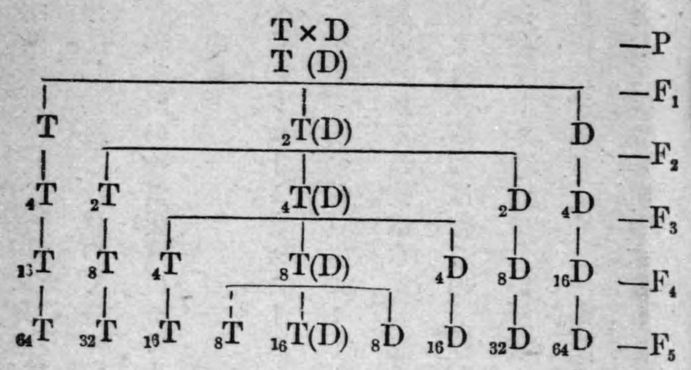
彼は一八六五年ブリュン自然科學者協會に於いて其植物雜種養成に關する論文を朗讀し、間もなく之を同協會の機關誌に公にした。爾後彼の說は全く世間から忘れ果てられたが、一九〇〇年別に他の學者に依つて發見された。それと同時に彼の名は再び世に現はれて來た。

メンデルは雜種養成の實驗に蜿豆を選んだ。夫は一には蜿豆の變種が比較的不變特異の性質を有するがためと、又た一には蜿豆ならば徹頭徹尾實驗者の望む通りの花粉のみを使用することが比較的容易であつたからである。彼は多くの蜿豆變種中から、普通六呎にも伸びる所の長大變種と一呎半位の矮小變種との二種を選んで交配させた。此初代の親植物の種子を蒔いた所が、その結果矮小種は一つも生じないで長大種のみが出來た。即ち初代目の親植物は長大と矮小との兩變種から成つて居たに拘はらず、夫から生じた子植物の一代目は總て長大のみであつた。然るに、

此一代目の子植物に同花受胎を行はしめて種子を取り、夫を地に蒔いた所が、今度は長大が七百八十七本、矮小が二百七十七本出來た。斯くて、子植物の一代目に於いて全く消滅したやうに見えた所の矮小種は、其二代目に於いて全植物の約四分の一に再現することが分つた。之は一代目の子植物の異花受胎から出來た種子に於いても矢張り同樣であつたと云ふ。そこで今度は此二代目子植物の矮小種と長大種とに夫々自花受胎を行はしめ、夫から出來た種子を蒔いた所、矮小の分からは總て矮小のみが生じ、其自花受胎に依つて生じた種子も矢張り矮小のみを造つて永久に矮小性を繼續したが、長大から生じた分は先づ其三分の一（即ち二代目子植物全體の四分の一）は永久に長大性を繼續する所の長大種であつたが、其三分の二（即ち二代目子植物全體の二分の一）は長大であつたが、夫は永久に長大性を繼續する所の長大でなくて、一代目子植物と同じく四分の三の長大と四分の一の矮小とを

生せしめるやうな長大種であつた。

右の實驗に於いて初代目親植物の長大性は其次の代、即ち一代目子植物に於いて全然その矮小性を征服せる如く見えたので、メンデルは此の場合長大性を優性と呼び、矮小性を劣性と呼んだ。蜿豆に限らず總て劣性の植物は代々劣性のみを造るが優性の植物は純粹の優性、即ち代々優性を繼續する所の優性と、不純の優性、即ち上例の一代目子植物の如く三と一の比例で優性と劣性とを生せしめる所の優性とを造る。いま便宜上、純粹の長大性、即ち代々長大性を繼續する所の長大性(tallness)をTとし、不純の長大性、即ち三と一の比例で長大性と矮小性(dwarf)とを生せしめる所の長大性をT(D)、矮小性をDとし、更らに初代目の親植物(parential generation)をP、一、二、三、四、五代目子植物(filial generation)を夫々F_1、F_2、F_3、F_4、F_5とする。之等の略字を以て前記の實驗を概括すると次の系圖が出來る。



以上はメンデルの實驗の結果を其まゝ紹介したのであるが、尙ほ此事實に對する說明を一通り心得て置く必要がある。此說明に就いてはメンデル自身の與へたものよりも、最近他の學者に依つて新たに提唱されたものゝ方が遙かに明晰で、又た遙かに多くの事實を包括し得ると信ずるから、私は寧ろ此後者に依つてメンデル說の根柢を紹介したいと思ふ。

兩性生殖に於いて男女雌雄の供給する物質は外形に於いては著しく異つて見えるけれども、遺傳の要素として見る時は絕對に同格である。而し

て此兩物質の結合に依つて生ずるものをジゴート（zygote）と云ひ、ジゴートは更らに分化し發達とに依つて一の成熟せる動物植物個體と成る。斯く互に合してジゴートを成す所の物質要素はガミート（gamete）と云ふ。ガミートの固有の部分は胚種細胞である。

今このジゴートとガミートとの概念に依つて、前記の實驗を綜合して見るに、長大性を示す所の蜿豆のガミートには分つべからざる單一の要素に依つて此長大性が附與され居るに拘はらず、矮小蜿豆の造るガミートには此要素が全然缺如して居るものと見做さねばならぬ。但し、此要素の根本性質如何の問題はメンデル說の理解には必ずしも必要でない。我々は只だ斯くの如き要素の在ると云ふことを假定すれば良いのである。そこで今試みに此兩變種の屬する蜿豆を交配させて見るに、其結果として生ずる所のジゴートは次の三種中の何れかであることが分る。

（一）複長大性のジゴート。即ち親植物の雙方のガミートに長大性要素の含まる場合。

（二）單長大性のジゴート。即ち親植物の一方のガミートに長大性要素の含まる場合。

（三）無長大性のジゴート。即ち親植物の雙方のガミートに長大性要素の含まれて居らぬ場合。

蜿豆に限らず、總て或る特殊の要素に就いて複優性なる個體は、其要素に依つて胚種細胞に與へられる特質を示し、或る時殊の要素に就いて無優性なる個體は、其要素なくして發達したる特質を示す。ジゴートが單優性なる場合には、其ジゴートの發達に依つて生じた個體のガミートには此要素を含むものと含まぬものとがある。換言すれば、複優性の個體は此要素を含む所のガミートのみを造り、無優性の

個體は之を含まぬ所のガミートのみを造るが、單優性の個體は之を含む所のガミートと含まぬ所のガミートとを造る。而して單優性個體に於いて斯くの如き要素を含む所のガミートと含まぬ所のガミートとは全く同量である。即ち單優性のガミートの一半は此要素を含み他の一半は之を含まぬと云ふことになる。

今、上記の蜿豆を單長大性要素の蜿豆と假定し、更らにTを長大性要素を有する所のガミート、tを該要素を含まざるガミートと假定して、其自花受胎の結果を調べて見るに、前の説明に依り胚珠も花粉も共に同量のTとtとから成つて居ることは明である。即ち胚珠の全數を100とすれば、其TもtもTとtとから成つて居ることになる。今之等の胚珠を花粉Tとtとにて受胎せしむる時は、其結果として T 胚珠50の一半はT花粉と合するが、其他の一半はt花粉と合して 25TT＋25Tt なるジゴートを造り、同樣にt胚珠50も亦 25tT＋25tt なるジゴートを造る。右の中TTジゴートは複長大性、tT及び Tt は何れも單長大性、Bは即ち無長大性である。之に依つて我々は二個の單優性個體が合する時は、其結果として四分の二の單優性と四分の一の複優性と、四分の一の無優性との生ずることを知る。之は單に蜿豆のみならず、他の一切の動植物に於いても亦同樣である。

然し、生物の身體特質が斯くの如く純粹に單一の要素に依る場合は事實上極めて稀であつて、メンデル法則に從つて遺傳される所の特質は、多くは二個若しくは二個以上の要素の存否に基いてゐる。而して此後者の場合の最も興味ある實例は、先頃亞米利加のレイモンド、パール博士が實驗した家禽の生殖力の遺傳である。

パール博士は多年の實驗に依つて、雌鷄の生殖力（即ち產卵力）の强弱は主としてジゴート內に於ける三個の異れる要素の存否に依つて定まることを發見した。この三個の要素は無論メンデル法則に依つて遺傳されるが、其中の二つは互に反撥

する所の性質を有して居るので同一ガミート内には絶對に共存しない。パール博士はFLL_2の文字を以て此三個の要素を示した。FLL_2の要素がジゴート内に同時に存する場合には、雌鶏の生殖力は最も強い。即ち冬季三十個以上の産卵を見るは之が爲である。FとLL中の何れか〻存する場合には、一個乃至三十個の卵が産れる。Lが二重に存する場合もあるが、其ために生殖力の増すことはない。ジゴート内にFのみ存する場合には、産卵は絶對に行はれぬ。然しLとL_2とは共に存在し又共に次代へ傳はるけれども、Fが無ければ卵は絶對に産れない。何故と云ふにFが無くして出來た家禽は雌鶏でなくて雄鶏だからである。

即ち雌鶏は雄鶏の有せざる一要素（即ち上例のF）を有して居るので、之をメンデル流に解釋すれば、雄鶏は雌優性にしてFを含まざるガミートのみを造り、雌鶏は單優性にしてFのあるガミートとFのないガミートとを半々に造ると云ふことになる。然るに兩性生殖と云ふものは雄のガミートと雌のガミートと合して始めて行はれるので、隨つて其結果として生ずるジゴートは、半は單優性であり、半は無優性であらねばならぬ。雌雄産兒の數がほゞ同一なのは全く此作用に依るのである。

最後に私は、人間にも亦メンデル式遺傳の行はるゝことを一言したい。其最も顯著なる一例は眼色の遺傳である。元來人間の眼は大體に於いて碧眼と茶眼との二種に分れる、碧眼に於いては眼球の虹彩を色取る所の色素は、其虹彩の背後に存する一個の層にのみ限られて居るので、此層の色素が虹彩を通して現はるゝが故に碧く見えるのであるが、茶眼に於いては此碧色素の層の前方に尙ほ黄色若しくは褐色の層がある。而して、此黄色若しくは褐色の層の存在は全く或る特殊要素のジゴートの存在に基因するものゝ如く思はれる。此要素は或は片親のガミートから來る

こともあらうし、或は又兩親のガミートの結合に依つて生ずる場合もあらう。即ち茶眼には複優性の茶眼と單優性の茶眼とがある。而して複優性の茶眼の人は永久に茶眼要素を含む所のガミートのみを造り、單性優の茶眼の人は該要素を含むガミートと、含まぬガミートとを半々に造る、前者は如何なる眼の配偶者を持つても常に茶眼の子女のみを擧げるが、後者は配偶者が自己と同種類の眼の人である場合には四分の一の割合にて碧眼の子女を造り、配偶者が碧眼の人である場合には二分の一の割合にて碧眼の子女を造る、之に反して、碧眼の人は碧眼要素に就いては全然優性であるから、該要素を含むガミートを造る場合は絶對に無い。隨つて、配偶者が共に碧眼である場合には、其配偶者の間には碧眼に非ざる子女は絶對に生れない。

次に痴呆瘋癲等も亦メンデル法則に隨つて遺傳されるが、之は人種改造學に直接なる問題であるから追つて詳しく論ずることゝし、最後に短畸指形の遺傳に就いて

一言しやう。

普通我々の指趾は拇指を除いては悉く皆な三個の關節から成つて居るが。短畸指形患者の指は拇指ばかりでなく何れも皆二個の關節から成つてゐる。而して同一家族に右の短畸指形患者と普通健康體の人とある場合、後者は永久に短畸指形病に冒されることは無いが、前者が普通健康體の人と結婚した場合には同比例にて健康體の子女と短畸指形の子女とが生れる。元來此の短畸指形なる病的變則現象は、ジゴート内に一の決定要素の存するがために生ずるので、普通人には斯の如き要素がないから、彼等は該病に冒されぬ健全なガミートのみを造るのである。短畸指形患者は一般に健康體の人と結婚するので、其子女は短畸指形要素に就いては總て皆な優性である。而して此子女のガミートには該要素を含むものと含まぬものとがあつて何れも全ガミートの二分の一を占める。次に之等の子女が更らに健康人と結婚する

と、今度は半々の割合で單優性(即ち短畸指形患者)と無優性(即ち健康人)とが出來る。

以上は人體に於けるメンデル遺傳の極く顯著な例だけを摘示したのであるが、之等の一二の實例に依つて見ても、メンデル說が如何に人種改造學と緊密直接の關係を有するかゞ分るであらう。然しメンデル說が將來人間の結婚に對して一個の確實なる實用的手引たり得るには、まだまだ餘程の改良と精練とを要するは言を待たない。

第四章　才能の遺傳

メンデル式方法は、遺傳問題に關する多くの研究方法中最も有効なるものと云はれて居る。メンデル說の此地位は恐らく將來も永く動くことはあるまいが、然しメンデル說は決して遺傳研究の唯一の方法ではない。メンデル說が今尙ほ未解決として放拋し居る研究方面は隨分澤山ある。之等の研究方面には、將來メンデル說の發達と共に解決を告げるものもあらうが、永久に未解決の儘で殘されるものもあるに違ひない。

今日メンデル說の缺點として最も致命的と見做されて居るものに二つある。一は個體の性質にはメンデル法に從つて遺傳されぬものが尠なからずあると云ふこと、他は各要素が完全に傳統されても、身體性質は遺傳の結果全く一變する場合があると云ふことである。尤も、一の性質が其完全なる發達のために數十乃至數百の要素の存在を要すると想像することは、必しもメンデル說を否定する所以ではないが、然し斯樣な性質を有する個體が他の全然夫を缺如せる個體と交配すれば、其間に出來る雜種は種々樣々のガミート構成を有し其數も亦至つて多いので、彼等が果して

同一の親から生じたものであるか否かを見定めることは非常に困難である。けれども其見定めが附かぬ以上、我々は到底夫等の要素の數及び性質を知る事は出來ぬ。我々が統計的研究法の必要を感ずるは實に斯くの如き場合に於いてゞある。

前にも云ふ如く、遺傳の統計的研究法を初めて世に公にしたのはフランシス・ガルトンであつた。ガルトンは一八二二年(卽ちメンデルの生れた年)英國バーミンガムに生れた。彼の父方の祖父はサムエル・カルトンと云ひ、クエーカー派に屬する銀行家であつた。サムエルは銀行業の傍ら自然科學を學び、又た統計術に堪能であつた。

フランシス・ガルトンの母方の祖父は、彼の物理學者として詩人として哲學者として有名なるエラスマス・ダアキンであつた。エラスマス・ダアキンは二度結婚した。彼は其最初の妻との間に數人の男子を擧げた。ロバート・ダアキン(卽ち『種の起原』の著者チアールス・ダアキンの父)は其一人であつた。エラスマス・ダアキンと其後妻との

の間に出來た一女は後にサムエル・ターチウス・ガルトンに嫁して男子を擧げた。夫が卽ちフランシス・ガルトンである。

ガルトンの統計的研究法の委曲を紹介するは容易のことでない。明細なる圖式と數字表との助を借るに非んば到底十分に夫を語り盡すことは出來ぬ。そこで私はガルトン說の理論的方面は全然拔にして、直ちに其應用の方面に入らうと思ふ。

ガルトンの統計的研究方法の應用方面として最も注意すべきは才能遺傳に關する研究である。由來人間の遺傳は決して其肉體的性質にのみ限らるべきではない。肉體的性質の遺傳されるは勿論であるが、精神的性質も亦或る程度までは確かに遺傳される。ガルトンは其最も顯著なる實例の一として才能の遺傳を擧げた。

彼は先づ其研究の對象として、一六六〇年より一八五六年に至る英國知名の判事二百六十八名を選んだ。彼は精密なる調査の結果、右二百八十六名の中、百九名は

血緣者中に一名以上の知名の士を有し、七十名以上は其血緣者中に二名以上の知名の士を有することを確めた、ガルトンの所謂知名の士とは四千人中の只一人に依つてのみ到達し得られる如き地位を贏ち得る人物を指すので、右の數字に依る時は、上記判事の血緣者は一般に社會の他の階級に屬する人々よりも遙かに多く知名の士たり得べき機會を有して居ることが分る。然しガルトンは單に斯くの如き論據に依りてのみ遺傳の說明を行ふとはしなかつた。彼は更らに、血緣關係の近きことが如何なる程度まで知名の士たり得る機會を多からしめるかを極めんとした。彼は知名の士數名を出したる家族を選び、夫等の家族中最も卓越せる人物に對する血緣關係の親疎を標準として其家族員を部別けし、各部に屬する知名の人物の百分比例を取つた。その結果、子孫側としては、子が三割六分、孫が九分、曾孫が一分半、父祖側としては、父が二割六分、祖父が七分半、曾祖父が五厘の割合で知名の人物を出

して居ることが分つた。而して斯くの如く中心人物を遠かるに從つて百分率の遞減する現象は、單に直系親族に於いてのみならず、傍系親族の場合に於いても矢張り同樣であつたと云ふ。のみならず前記二百八十六名の判事中、比較的地位名望の高き者は、他の比較的地位名望の低き者に比して、平均二割以上の割合にて知名の血緣者を有して居ることが分つた。即ち右の二百八十六名中、三十名の大法官は約八割の比例にて知名の血緣者を有して居たに拘はらず、他の二百五十六名に於いては其比例は僅々三割六分に過ぎなかつた、それは、大法官が他の人々よりも不正手段に依つて自己の血緣者を引立てる機會を比較的多く有して居るがためだと說く人もあらう。故にガルトンは斯くの如き懸念の生じないやうに、豫め上記二十四名の大法官の家族を精査して、其家族に屬する知名の人物の實力には殆ど疑を挿むべき餘地のなきことを確めて置いた。

以上はガルトン著『遺傳せらるゝ天才』に現はれた研究の一端を示したものであるが、彼は更らに其後の著『有名なる諸家族』に於いて、之とは稍〻異れる方法を以て右の問題を解決しやうと試みた。即ち彼はローヤル、ソサイエチー(學士院)會員の家族員中、自己獨特の職業方面に於いて、科學者をしてローヤル、ソサイエチー會員たらしめる榮譽と略〻同等の榮譽を贏ち得たものが幾人あるかを調べんとした。彼は該書に、斯くの如き榮譽を獲得せる人物三人以上を有する家族の記事を掲げて居るが、其記事を一寸素讀したゞけでも、斯くの如き人物が或る特殊の家族に累積されるのは決して偶然の結果で無いことが分る。

斯くの如く、人才が或る特殊の家族に集中するのは決して偶然の結果でないと云ふことに就いては、殆ど何人も異議を挿まないが、然し夫が遺傳の結果であることを認めぬ人は隨分ある。彼等は曰く、或る特殊の家族に多數の人才が輩出するの

は其家族が自己の家族員に對して特に人才の發生に有利なる境遇を供給するが爲めであつて、決して遺傳の結果ではないと。

我々は決して境遇の影響を無視するものではない。人間の精神的特徴が或る程度まで境遇に依つて決定されることは、我々と雖も十分に之を認める。隨つて、精神的に密接なる關係を有する人々が或る種の精神的特徴に就いて類似を示した場合、夫を或る程度まで境遇の影響に歸することは決して誤りではない。何故ならば、同一家族に屬する人々は、異れる家族に屬する人々よりも、比較的同一の境遇に影響され得る場合が多いからである。然るに、斯く同一家族に屬して比較的同一の境遇に支配される人々の間からも、時に依ると非常に性格の違つた人間の生ずる場合がある。斯くの如き事實は、人間の精神的特徴が總て境遇に依つて決定されると說く見解とは全然一致しないが、交代遺傳の事實、即ちガミート若しくば胚種細胞の適

當なる結合が行はれた場合、數代間潛伏して居つた所の特徴が突然鮮かに再現し來ることを認める所の遺傳說とは必ずしも矛盾しない。

最後に私は、斯く人間の精神的持徴が或る程度まで遺傳に依つて決定されると云ふことの證明として、實驗心理學の齎らす事實を參照しやう。元來實驗心理學の一般的目的は人間の極く單純なる能力に對する實驗方法を案出し、之に依つて各種の精神的行程を分解記述する點に存するので、精神作用の働き方を發見するのが其本來の目的である、隨つて、實驗心理學は遺傳研究を其直接の目的とするものではないが、遺傳研究が實驗心理學の研究の結果に依つて間接に大なる裨益を得ることは言ふまでもない。

今日まで實驗心理學が遺傳研究に與へた貢獻は、量に於いては極めて僅少であるが、然し其僅少なる貢獻の中にも、我々は麗げながら將來の大なる發達を豫想する

ことが出來るのである。

私は一例として、バート氏の研究を紹介しやう、バート氏は同年輩なる三組の少年を比較した、夫は第一が牛津の某豫備學校の生徒第二が同市の某高等小學校の生徒、第三がリバープールの貧民窟の少年である。第一の牛津豫備學校の生徒は、大學教授、專門學校講師、ローヤル、ソサイエチー會員、牧師等の子であつて、所謂精神的業務を職とする家族に育つたものである。之に反して第二の高等小學校の生徒と云ふのは、大部分は小商人の忰である。

此三組の少年の能力を比較するためにバート氏は種々なる試驗法を試みた。一例を擧げれば、二組のアルハベット、カードをゴチャ交ぜにして夫を一枚の紙の上に擴げ、その中から二組の完全なるアルハベットを揃へさせる方法である。此試驗の結果、第一の豫備學校の生徒は平均七十四秒、第二の高等小學校の生徒は平均九十

一秒、第三の貧民窟の少年は平均百二十三秒を要することが分つた。

斯くの如き現象は人間の能力が遺傳されることを假定せずしては、到底十分に之を説明することは出來ぬ。尤も同一程度の學校に通ひ同一程度の教育を受けて居る子供でも、家庭教育の如何に依つて能力の發達上多少の差違を生ぜしめることは許さねばならぬが、それにしても教授や牧師の家庭と、小商人の家庭とが、子供の教育に於いて上記の能力差異を生せしめる程に、爾かく異つて居らうとは思はれぬ。

才能遺傳の問題に關しては此上もう冗々しく事實を羅列する必要はあるまい。只だ私は最後に、精神的の特質と肉體上の特質との關係に就いて一言添加して置き度いことがある。夫は、精神的の持質と肉體的の特質とは、決して世人の言ふ程爾かく互に獨立無關係のもので無いと云ふことである。元來精神的の特質なるものは、或る程度までは、肉體的の特質の、殊に腦の或る部分の構造の外部的表現と見做さ

ねばならぬので、精神的特質が遺傳すると說く以上は、此腦の或る部分の構造も亦當然に遺傳するものと認めねばならぬ。所が、此腦構造が遺傳されると云ふ事實は今日迄の所まだ十分に發見されて居らぬ。只だ、同一家族に屬する人々の腦溝に著しく共通の點が存すると云ふことだけは、一般に認められて居る樣であるが、其共通點が果して精神的特質の類似の基礎であるか何うかは、尙ほ將來の研究を待つた後でなければ斷言は出來ぬ。

第五章　結核病、躁狂、痴呆、瘋癲

遺傳を主なる原因とする多くの疾病中、其危險性の大なる點に於いて、其蔓延の一般的なる點に於いて、結核病ほど恐ろしいものはない。而して結核病殊に肺結核病は、元來同一家族內に蔓延する傾向を有するものであるが、此傾向は十九世紀末

までは全く遺傳の結果だと見做されて居た。然るに、其後結核菌の發見せられて以來、結核病その者は決して遺傳するもので無く、結核が同一家族内に蔓延するは全く傳染の結果であると云ふ說が一般に行はれて來た。然しながら、假りに結核病その者は全く傳染のみに依つて蔓延すると假定した所で、結核菌に對する抵抗力が人に依つて著しく違ふことは拒む譯には行かぬ。元來結核菌なるものは、我々の周圍には何處にも居るので、其襲擊を全然免れ得るやうな人は殆ど無いと云うて差支ない。只だ、襲擊はされても、當人の氣附かぬ間に治つて了ふ場合が多いのである。そこで、結核病の强度に斯くの如き差違を生ぜしめるのは、果して冒される方の人間によるのか、乃至は冒す方の結核菌に依るのかと云ふ問題が起つて來る。

結核菌に重きを置く方は學者（例へばメチニコフ）は結核菌に二種あることを主張する。即ち一は非常に襲擊力の强い惡性の黴菌であつて、他は比較的襲擊力の弱

い溫和な黴菌である。我々が若し幸にして後者に冒されたとすると、我々は丁度種痘が痘瘡に對して免疫を與へると同じ意味で前者に對して惡疫を受ける。此說は恐らく間違のない說であらう。然し此說は決して、一方に冒される方の人間にも亦、疾病の强度や左右するやうな原因の存し得ることを除外するものではない。

傳染に重きを置く論者は、親子が共に肺結核患者である場合の多いのは、彼等が常に接近する機會の多きが爲であつて、決して遺傳の結果ではないと說くが、然らば夫婦の場合は如何と云ふに、夫婦が共に肺結核患者である場合は決して親子の間ほど頻繁ではない。之は統計を見れば直ぐに分ることだが、斯くの如き現象は單に傳染のみに依つて肺結核の蔓延を說明せんとする見解を以てしては、到底十分に之を解釋することは出來ぬ。何故と云ふに、互に接近する機會の多いと云ふ點に於いては、親子と夫婦との間には大體に於いて何等の差異がないからである。

故に、我々は單に傳染のみならず、遺傳も亦或る程度までは結核病を蔓延せしむる所の原因たり得ることを承認せねばならぬ。結核菌その者は勿論遺傳せぬであらうが、結核菌に對する各人の抵抗力、即ち各人の結核素質は遺傳するものと見るが至當である。之は單に肺結核のみならず、躁狂に於いても亦同樣である。倫敦府立養育院の病理學者モツト博士の調べに依ると、同院收容躁狂患者二萬人の中七百二十五人即ちその三分六厘は互に血緣者であつたと云ふ。ヘロン博士は幾多の躁狂患者の家族を調べて、一般に躁狂が親子の間に遺傳する比例は、身長が親子の間に遺傳する比例と畧〻同一であることを發見した。尤も躁狂が遺傳するとは云ふ者の、實は躁狂その者が遺傳するので無くて、結核病の場合と同じく躁狂的の素質が遺傳すると見る方が至當であらう。元來、人間に結核病の生ずるのは、前にも言ふ如く結核菌が人間の身體を冒す爲であるが、躁狂の場合に於いては患者の生涯に於ける

或る異常の出來事が其直接の原因となるのである。然し、生れつき結核的素質の無い人ならば假令結核菌に襲はれても、當人の知らぬ間に苦もなく之を擊退することの出來ると同じやうに。躁狂的素質の具有を全然免れて居る人は、人生の如何なる危機に遭遇しても毫も危險を意識することなく、平然として之を打越すことが出來るのである。尤も茲に躁狂的素質と云ふのは人間の精神の不安定なる狀態を指するので此狀態は人に依つて著しく其度合を異にするものであるから、嚴密に之を素質と云ふことの出來ぬは言ふまでもない。

我々の生涯に起る危機の中で、最も一般的と見做されて居るのは春氣發動期であるが、此春氣發動期に於いて男女の精神は最も大なる動搖を受ける。然し此危機を無事に通過した所で、女としては尙ほ出產期、男女共通の場合としては尙ほ變換期即ち性的生活の終結期と云ふ大厄が殘つてゐる。攪亂的影響を有する變則狀態のう

ち最も重大なるは、急性的乃至慢性的の精神的緊張であつて、之は男よりも女の方に影響が多い。飲酒は躁狂病の最も主なる原因と見做されて居るが、飲酒の結果躁狂を惹起して養育院に送られる場合は、女よりも男の方に多い。

攪亂的影響を有する變則狀態としては、尙ほ負傷及び變災を數へることが出來る

躁狂病の徵候は人に依つて區々であるが、要するに躁狂病の徵候に斯く差異を與へる根本の原因は、一部分は病氣その者の原因如何に依つて、一部分は患者の年齡如何に依つて、一部分は患者の先天的素質の如何に依つて定まるものゝ樣に思はれる。患者の先天的傾向如何が病氣の徵候を左右することの證左として、私は特殊の家族に限つて特殊の躁狂病が蔓延すると云ふ事實を擧げたい。

例へば、躁狂病の一種に幾度か發し幾度か治ることを以て特色とするものがある。普通、回歸性躁狂と云はれて居るのが夫である。前記倫敦府立養育院の收容患

者中には一生涯に二十回も此躁狂に襲はれたものがあると云ふ。彼等は治つた都度『全快者』として退院を許されたが、中には退院中數人の子を擧げたものもある。一人の回歸性躁狂患者が六名の同病子女を產んだ例もある。兎にかく、此病氣は患者の生殖力を減退せしめず、又た遺傳の傾向が比較的強いと云ふので、人種改造論者からは最も危險なる種類の躁狂病と見做されてゐる。

各方面の專門家の說に依ると、近年躁狂患者の數は著しく增加して來たさうであるが、然し夫が果して眞に事實であるか、何うかは疑はしい、其疑はしい理由として、モツト博士は次の三箇條を擧げた。一、正氣と云ふことの（即ち躁狂で無いと云ふことの）標準が近來非常に高まつて來たこと。養育院の設備と、躁狂患者取締機關とが近年著しく進步して來た事は云ふ迄もないが、その結果として、從來餘り害の無い白痴狂人として幾分大目に見られて居つた者でも、今日では總て嚴

重に取締られ、大抵の者は皆な養育院へ送られることになつてゐる。又た一旦養育院へ收容された者に就いては、養育院の規模と設備とが不十分であつた爲め從來は大抵の所で之を全快者と見做し退院を許す例であつたが、今日では事實上眞に全快したことの鑑定のついたものでなければ退院を許されない。隨つて、國家全體から云へば、躁狂患者の數は實際さう殖えて居る譯では無いが、取締り方法と收容機關との完備せる結果患者が一箇所へ集中された爲め、表面上從來よりも非常に殖えた樣に見えるのである。二、養育院の衞生條件が進んだ結果、收容患者の死亡率が著しく遞減したこと。隨つて、實際に生じた患者の數は同じであつても、殘存者の率が高まつた結果、一見病氣その者の蔓延率が從來よりも一層高まつたやうに見えること。三、老衰者は從來總て救貧院に送られる習であつたが、今日では躁狂患者と見做されて養育院に收容される場合が多くなつたこと。

精神病中、遺傳性の最も強いのは痴呆である。トルドゴールド博士は痴呆を定義して、痴呆とは精神が人並みの發達を遂げ損ねた狀態だと云つた。然らば、人並みの發達とは如何と云ふ問題が起る。そこで彼は更らに此の定義を修正して次の如く云つた。『痴呆とは患者をして、自己が親より讓り受けたる社會的地位に於いて社會の一員として、義務を履行すること能はざらしむる如き精神的不具の狀態を云ふ。而して此狀態は或は先天的なることあり、或は又た後天的に幼時より生ずることあるが、何れにしても、患者の不完全なる腦發達の結果として生ずるものであることは爭はれぬ。』

痴呆に三種ある。第一は癡愚と云ひ、極く普通の身體的危險に對してすら十分に自己防禦を行ふこと能はざる程に、先天的に、若しくば幼少時より、精神の缺耗せる狀態を指す。癡愚よりも稍〻增しなるを魯鈍と云ふ。魯鈍者は自己防禦の能力

は有してゐるが、一定の職業に從事して獨立に生活を營む所の能力を全然缺如してゐる、痴呆症の最も輕微なるものを懶弱（フイーブルマインド）と云ふ。懶弱者は場合に依つては、一定の職業にも携はり自活も出來るが、均等の條件の下に於いては到底普通人と競爭して行くことが出來ぬ。

前記トルドゴールド博士の調査に依ると、現在イングランド及びウエールスに於ける痴呆患者の數は、その全人口の約千分の四に當つて居ると云ふ。更らに之を內譯すると癡愚者が一割、魯鈍者が三割、懶弱者が六割に上る。即ち全痴呆患者中の大部分は懶弱者である。普通、痴呆患者と云へば直ちに懶弱者を意味するものと思はれて居るのは即ち之が爲めである。

斯く懶弱者は全痴呆患者中の大部分を占めて居るので、國家としては他の癡愚者や魯鈍者よりも、寧ろ此懶弱者の矯治取締に全力を注ぐべきであるは言ふまでもな

い。

尙ほ懶弱者が如何に國家の發達を妨げ、國民の安寧を害するものであるかは、英國に於ける酒癖矯治所及び救助院の收容患者の大部分、並びに移住囚徒の大部分が總て此の痴呆患者であることを見ても分る。後等は極めて强烈なる本能と欲望とを有して居るが、而も之等の本能欲望を抑制指導する所の意力を缺いで居るので、動もすれば恐ろしき誘惑の虜となる。彼等の精神的不具は決して性慾の發動を阻礙する程に甚しくない。彼等の生殖力は多くの場合常人と少しも異ならぬ。

痴呆の發生が或る程度まで遺傳に負ふ所あるは、上記の定義に依りて明かであるが、然し遺傳は決して其總ての原因ではない。遺傳の外に尙ほ、患者の出生以前、若しくば出生中、乃至は出生以後の諸種の境遇的條件も亦、或る程度までは其原因となるのである。而して夫等の境遇的原因中、一般に最も重要視されて居るのは兩

親の飲酒癖である。當人が母の胎内に出來る以前から既に兩親が飲酒に耽つて居つた場合にしろ、乃至は當人が母の胎内に出來てから後に母が飲酒に耽り初めた場合にしろ、何れにしても兩親の飲酒癖が子女の痴呆の重要原因たり得ることは今日何人も之を疑はない。尤も中には、後者よりは寧ろ前者の場合に重きを置いて、子女の痴呆性の主要原因たるは飲酒癖に依つて變化を受けた兩親の胚種細胞であると主張する學者もあるが、然し又一方には母の飲酒が直接胎兒の身體に影響を及ぼし、その結果として胎兒の懶弱的傾向を惹起する場合の方が多いと說く學者もある。此の後者の說に據ると、母の飲んだアルコールは最初先づ母の血液と混和し、次いで胎兒の血管に滲入するのであるが、夫がために胎兒の發達と組織分化とは非常な阻碍を蒙るので、彼等の心身は遂に全く正則の發達を遂げることが出來なくなる。然し、アルコールが兩親の胚種細胞に影響を與へた場合と雖も、必ずしも之と同樣の

結果を推測することが出來ぬ譯ではない。

痴呆を生ぜしめる所の境遇的原因としては、兩親の飲酒癖の外、尙ほ患者が生前若しくば生後に受けた腦髓損傷を擧げることが出來る。トルドゴールド博士は之に就いて次の如く言つた。『之はつまり腦血管が破裂するので、その結果として腦髓組織の或る一局部の破壞が釀されるためである。而して斯種の患者に於いては、痴呆は多くの場合瘋癲若しくは中風を伴ふ』彼は尙ほ今一つの原因として、患者の幼時に於ける急性傳染病を擧げた。

然し痴呆を生ぜしめるに就ては、之等各種の境遇的條件の總和よりも遺傳の方が遙かに大なる原動力であることは言ふ迄もない。デーブンポート及びキークス兩博士はメンデル說に依つて痴呆の遺傳を說明しやうとした。

由來、人間の精神が正則の發達を遂げ得るためには、ジゴート内に或る特殊の決

定要素の存することを必要とする。此要素はメンデル法に從つて遺傳されるので、ジゴート內に此要素が存在せる場合には、必ず瘋癲か痴呆かゞ生ずる。而して、此要素に就いて單優性なる人は一見普通人と少しも違はぬやうに見える場合もあるが又た中間的の精神狀態、即ち酒癖若しくば神經病を呈する場合もある。此要素を二重に有する人、即ち此要素に就いて複優性なる人でなくては、精神狀態に就いて眞に正則の人と云ふ事は出來ぬ。此假定に依る時は、兩親が共に痴呆性乃至瘋癲性である場合、若くば兩親の一方が痴呆患者で他方が瘋癲患者である場合には、其兩親の間に出來た子女は總て皆な先天的に此兩病の一を有して居るべき筈である。又た兩親の一方が正則的精神狀態、即ち複優性にして一方が痴呆患者なる場合には、其子女は總て單優性でなければならぬ。之に反して、父母が共に單優性である場合には、其子女の四分の一は通常人、他の四分の一は瘋癲性若しくば痴呆性、殘餘の二

分の一は總て單優性でなければならぬ。而して、單優性の人が通常人と結婚したる場合には、其間に出來る子女の二分の一は通常人であるが、他の二分の一は單優性である。此單優性なる子女が更らに瘋癲若しくば痴呆患者と結婚すると、今度は半半の割合で單優性の子女と瘋癲乃至痴呆性の子女とが出來る。最後に兩親が共に複優性(即ち通常人)なる場合には、其子女も亦た總て複優性でなければならぬ。

最後に尙ほ一つ注意すべきことは、私が今まで論究して來た各種の有害なる先天的素質なるものは、決して各自獨立に存在するものでないと云ふことである。甲の家族に共通の先天的素質が乙の家族に現はれる場合もあらうし、又た乙の家族の先天的特徵が甲の家族に現はれる場合もあらう。痴呆性の傾向を有する家族に、酒漢の生ずることもあれば、浮浪人の生ずることもあらう。同胞の一方が犯罪人となり他方が娼妓となる場合もあらう。故に將來何等かの强制手段を以て、痴呆患者の增

殖を防ぐこと可能なるに至れば、其結果は單に痴呆その者の防止を意味するのみならず、他の酒癖・賣淫、結核病、犯罪等も亦同時に豫防されることになるのである。

上記諸病の外、尙聾啞及び或る種の眼病も亦遺傳性あるものと認められて居る。或る學者は之等の疾病と、近親結婚との間に極めて密接の因果關係あることを主張するが、近親結婚と雖も、當事者雙方の胚種細胞に一定の病的素質の潜在せざる場合は差して恐るゝに足りないが、斯くの如き病的素質が果して實際潜在して居るか何うかを定めることは至つて困難である、幸にして潜在して居らねば良いが、萬一潜在してゐるとすると、夫は實に容易ならぬ事で、單に當事者の一方に病的素質の存する場合、乃至は當事者の雙方に異種の病的素質の存する場合よりも遙かに大なる危險を子孫に殘すことになる。元來、近親者同士の潜在素質は、他人同士の潜在素質よりも遙かに類似する場合が多いので、隨つて危險の因をなす怖れも多いことになるから、成るべくなら、近親結婚は避けるやうに努めるが得策である。

第六章　境遇の影響

人間の身體の總ての部分、人間の心身の總ての習慣、熟練も、能力も、疾病も、才智も、その發達の行程に於いては、總て皆な胚種細胞の性質、及び各個人が現に接觸しつゝある乃至は從來接觸し來つた所の外部的諸條件に依つて、間接直接の支配を受けて居るので、或る種の特徴、例へば眼色の如きが、一見毫も境遇の影響を受けて居らぬ樣に思はれるのは、實は其發達を可能ならしむる所の外部的條件が餘りに錯綜せる爲めであつて、決して境遇の影響その者に一定の制限あるがためではない。

生物の變化發達が總て自然と營養（即ち遺傳と境遇）との共同作用に依つて行は

れることは言ふ迄もないが、此兩者の中、果して何れがヨリ大なる影響を與へるものであるかを定めるのは却々容易の事でない。ガルトンの有名なる二子研究は、此問題の一般的解釋を發見せんための試みであつた。彼は多年の根氣よき通信に依つて、百組の二子に關する報道を蒐めた。彼は周到なる研究の結果、之等の二子が二個の全く異れる、部類に分たれることを發見した。第一は風貌も性格も非常に良く似てゐる同胞であつて、此部類に屬する二子同胞は總て皆な同性であつた。之に反して、第二に屬する二子同胞は風貌も性格も際立つて違ひ、同性のものもあれば異性のものもあつた。之等の兩部類に屬する二子は、言ふまでもなく、最初は互に皆な殆ど同一の境遇から出發したのであるが、長じて各自別個の職業を撰ぶに及び、彼等は夫々皆な自己獨特の境遇に依つて支配されるやうになつた。第一部類に屬する二子同胞の中には、斯く境遇の異つた結果として、幾分か最初の類似を失墜する

に至つたものもあるが、然し中には又た、一生涯を通じて最初の類似を其儘に維持して居たものもあつた。

ガルトンは此現象を總括して次の如く言つた。『我々は之に依つて、毫も境遇の變化に影響せられざる如く見ゆる所の自然の類似の實存し得ることを知る』。又た成長後最初の類似を失墜した場合と雖も、其の原因は必しも總て之を境遇の變化のみに歸し去ることは出來ぬ。何となれば、之等の場合の或るものは、成長後初めて表面に現はれ來る如き本有的差異の結果であつたかも知れないから。

境遇の影響と云ふことが實際眞に有力のものであるとすれば、上記の第二部類に屬する二子、即ち風貌も性格も先天的に際立つて違つてゐる二子同胞は、其幼時の同一境遇の結果として多少は其差異を減じさうなものであるが、斯くの如き場合は事實上ほとんど絶無と云ふて差支ない。例へば、或る父母は斯うガルトンに報告し

た。『誕生後今日に至るまで、彼等は全く同一の營養を享けて居りました。彼等は又た何れも、至つて强壯の方でありました。然し、彼等は肉體的にも精神的にも又た其情緒的性質に於いてさへも、到底一つ親の小供とは思はれぬ程に違つて居りました』。又た或る父母は斯う報告した。『彼等は、肉體に於いても精神に於いても、大變に違つて居りまたした。一方は、溫和で內氣でお人好しで何事にも鈍い方でありましたが、一方は又た、非常に敏捷く進擊的で、何事も直に覺えるが、又た直に忘れると云つた風の子でした。彼等は最初から一緒に教育されました。彼等は未だ曾て一つ家を離れたことはありませぬ。』

斯種の例は擧げればいくらも有るが、私の論據を支へるには之で十分であらう。其論據の要旨は斯うである。先づ一方に、最初から非常に似て居る二子同胞がある。彼等は成長後それ〴〵別個の境遇に置かれたが、尙ほ最初の儘の類似を維持して居る。然るに一方には又た、最初から非常に違つた性質の二子同胞がある。彼等は幼小時代全く同一の境遇の下に成長したに拘はらず、最初の差異を少しも變へずに維持してゐる、前者に於いては、營養の差異は自然の類似を破壞することが出來なかつた。後者に於いては、營養の類似は自然の差異を破壞することが出來なかつた。營養の力は斯くの如くにして屢々自然の力に壓せられる。

右は此の、自然と營養との輕重に關する問題のホンの輪廓だけを紹介したに過ぎぬが、此の問題に就いては尙ほ幾多の部分的研究あることを忘れてはならぬ。夫等の部分的研究中、私が先づ第一に紹介したいのは、カール・ピアソン博士の視覺研究である。人間の視覺と云ふものは、元來何の點まで遺傳に依つて支配せられ、何の點まで境遇の影響を受けるものであらうか。此問題を解決せんが爲めに、ピーアソン博士は先づ、各種の視覺疾陷に就いて、父母と子女との間に、又た同一父母の子

女の間に存する類似の量を測定しやうとした。彼は次に多數學童の家庭境遇と、其學童の視覺狀態との間に存する必然的關係を發見しやうとした。

彼は此第一の研究の材料として、瑞西の眼科醫アドルフ●スタイゲル博士の覺書を利用した。此の覺書を仔細に調査した結果、彼は、角膜複視と。屈折錯誤との發達程度に就いて、父母と子女との間に一個の極めて密接なる類似關係あることを發見した。又た兄弟姉妹の間にも、視覺狀態に就いて非常に顯著なる類似關係のあることを發見した。而して、此事實は啻に前記、スタイゲル博士の覺書のみならず、他の多くの學者の研究の結果に於いても亦、同樣であつたと云ふ。然し、茲でピーアソン博士の數字的研究を紹介する餘地はない。私は只だ、博士の研究の結論として次の一事を語れば足る。即ち一、眼の科學的特徵には遺傳性があること、二、眼の科學的特徵は、人間の他の科學的特徵と全然同一の强度を以て遺傳すること。

ピーアソン博士は次に、第二の、學童の視覺狀態に關する研究の材料として、エジンバラ慈善協會に發行された、『エジンバラ市に於ける學童千四百人の肉體的狀態に關する報告』を使用した。彼は之等の學童の家庭境遇を次の四個の標準に依つて分類した。一、一室宛人數、二、經濟事情、三、父母の物質的狀態。四、父母の道德的狀態。次に學童の視覺に就いては、彼は、各學童の視力を標準として、又た屈折錯誤の存する場合には、其屈折錯誤の種類如何を標準として、之を分類した。

然し、家庭にしろ、學童の視覺狀態にしろ、如何なる方法に依つて之を分類して見ても、視覺疾陷が善境遇よりも惡境遇と關連する場合の方が多いと云ふ事實は、毫も發見されなかつた。故に此場合に於いても矢張り、前記の四種の家庭境遇に依つて代表される如き『營養』に比較する時は『自然』の力の方が遙かに優勢であたことが分る。

次は學校生活と近視眼との關係であるが、之に就いては、ピーアソン博士は獨逸の眼科醫コーン氏の統計に基いて、一般に其兒童の近視眼の發達程度は學校生活の期間の長短に比例すると云ふ說を公にした。然し、彼は、此事實あるが故に、學校生活は即ち近視眼の主一原因だとは云はなかつた。由來、近視眼なるものは一般に年齡と正比例を以て進む傾向あるもので、必しも學校生活その事と直接の關係がある譯ではない。故に、近視眼の發達程度と學校生活の長短とに比例的關係ありとするも夫は決して學校生活その事が近視眼の直接原因であるが爲でなくて、學校生活期間の長短が直ちに年齡の大小を意味するからである。

遺傳と境遇との輕重問題に就いては、尙ほ今一つ、ヘロン博士の研究の結果を紹介する必要がある。ヘロン博士は倫敦府に於ける十四の小學校の學童に關する、教育委員會常任醫師カー博士の調査に基き、家庭境遇と學童の知識との關係に就いて

綿密なる研究を遂げた。

之等の學童は、最初夫々自己の受持ち教師の見計ひに依つて五個の部類に分たれた。この分類は各學童の智的能力を標準として行はれたのであるが、その標準の觀方が各區々であつた爲め、甲の學校では其全生徒の三分の一が聰明なる學童であつたと云ふに、乙の學校に於いては其全生徒の僅々三十分の一が聰明と鑑定された。之は要するに、聰明と云ふことに對する兩校教師の觀方が違つて居つた爲めである。

そこで、此缺點を補ふために、各校に就いて別々に統計的測定を行ふ必要が起つた。次に、身長、體量、服裝、齒、食物、身體の潔不潔、扁桃腺の狀態、聽覺等に就いても亦、何等かの方法に依つて測定が行はれた。從來、之等の特徵は總て智力と密接の關係あるものゝ如く思はれて居たが、此研究の結果、夫等の特徵が智力を支配する程度は極めて僅少であることが分つた。尤も中には、女子の服裝の如く、當人

の智力と極めて密接の關係ある事實もあつた。即ち、聰明な女子は多くは皆なキチンとした服裝をしてゐた、然しながら服裝の整頓と云ふことは必しも良家の子女たることの必然の結果ではない。即ち、聰明は必ずしも良家の賜物ではない。寧ろ聰明なるが故に、服裝に整頓の生ずる場合が多いのであらう。次に、男子の智的能力は、服裝よりも寧ろ身體の潔不潔と關連する場合の多きことが分つた。然し夫は、女子の智力と服裝との關係ほど密接ではなかつたと云ふ。

此の、ピーアソン、ヘロン兩博士の研究は何れも皆な有益な研究であるには違ないが、然しまだ到底、自然と營養との相對的影響に關する一般的問題を解決し得るほどの有力でないことは勿論である。彼等は學童の視覺と智力とが、果して何の程度まで其學童の境遇に依つて決定されるかと云ふ部分問題に對してすら、殆ど何等の解決を與へやうともしなかつたではないか。兩博士の取扱はなかつた境遇的條

件の中に、或は却つて境遇としてた影響は一層大なるものがあつたかも知れぬ。然し假令夫が事實であるにした所で、其ために兩博士を非難することの出來ぬは云ふ迄もない。材料の制限は總ての點に於いて、彼等の研究を狹めたからである。我々は彼等の研究の不足を非難するよりも、寧ろ彼等の功績の甚大なるに驚嘆するのである。其功績の一は、彼等が斯くの如き難問題に對しても、尙ほ一個の精確なる統計的研究法を適用し得るの望あることを知らしめた點に對する。其功績の二は、彼等が斯くの如き統計的研究法を適用することに依つて、夫れ一個として見れば非常に有益なる幾多の結果を獲得した點に存する。由來、人間の研究には、比較的迅速確實なる直接實驗の方法を適用することが困難なので、研究者は已むを得ず、統計若しくは類推の方法に賴らねばならぬことになる。之等の方法は其適用に誤りのなき限り、研究者をして失望に導くやうなことは勿論無いが、然し之等の方法に依つ

ては、到底かの實驗的方法に依つて得らるゝ如き直接迅速の結果を豫期することは出來ぬ。

尙ほ、境遇の影響に就いて誰れしも多少の經驗を有する事柄が一つ二つある。私は之等の事柄を檢覈することなしに本章の題目を去ることは出來ぬ。筋肉は特殊の運動を與へれば、其結果として筋肉が次第に强大に趣くことは、誰れしも知る所であるが、然し如何に運動を與へたからとて、筋肉の發達には限度がある。或る一定の程度に達すれば、筋肉は最う其上發達することは出來ぬので、其後の運動は要するに只だ右の程度まで發達した筋肉の狀態を維持するに留まる。之は啻に筋肉の發達に於いてのみならず、或る種の熟練、例へばゴルフ遊戯に要する熟練などに於いても矢張り同じことである。ゴルフ選手の熟練が或る一定の程度に達すると、彼等は最う、如何に熱心に練習しても、又た如何に熱心に教授されても、到底其程度以上

の發達を見ることはない。競馬馬の速力にも亦た一定の發達限度がある。練習は或る程度までは速力の上に非常な差異を生ぜしめるが、此程度を越えると最う積極的には何等の效果も與へない。之は一般に懸賞試驗、例へば文官任用試驗などにも見られることで、應募者の知識の詰込、程度は夫々皆な違ふが、然し彼等が其試驗のために費す努力には決して左程の差異がある譯ではない。何れも皆な自己の力の及ぶ限り勉强して來る。而も實際に試驗を行つて見ると、最初の二三の應募者の間に於いてすら、點數に於いて既に最う非常な差異が現はれる。ゴルフ專門家は、或は公開の競技に於いて、或は其他の競技に於いて、絶えず互に競爭してゐるが、實際番附面で上位を占めるのは僅々一二の人に過ぎぬ。而も其一二の人は大抵いつも定まつて居るので、他から新たに割込んで來て一躍直ちに上位を占めるやうな場合は殆ど絶無と云ふて差支ない。

之等の事實に依つて、我々は營養は確かに個人を型どるものであるが、然し最後の決定を與へるものは矢張り自然であることを知る。成る程、著しく熟練に長じた人なり馬なりの演技を見て、之を他の未熟練なる人や馬の技術に比ぶれば、其技術の差が一見全く練習の結果として生じたものゝ如く思はれるのは無理もないが、然し前にも云ふ如く、練習に依つて與へられる熟習程度には、人に依つて皆な一定の極限がある。而して、此極限なるものは全く自然の結果であるから、熟練上の差異の大部分は結局矢張り自然の賜物と見るの外はない。

之に就いては、此上最う諄々しく説明を加へる必要はあるまい。ガルトンは次の比喩を以て自然と營養との關係を説明せんとした。試みに數個の木片を取つて之を小川に投じて見るに、或るものは最初流の最も急な場所に落ちた爲め非常な勢を以て進んで行くが、其うち又た何かの障碍に會つて急に進行の歩を緩める。斯くす

る間に、最初流の最も緩漫な場所に落ちた他の木片が後から押寄せて來て遂に之を追ひつめる、斯樣にして彼等は互に先を爭ひつゝ、絶えず勝敗の運命を交換して進んで行くのであるが、海に着くのは大抵皆な同時である。故に進行の或る一點を取つて考へれば、彼等の勝敗は全く周圍の偶然的條件に依つて決定されるものゝ如く見えるが、出發時から海に達する迄の全體の旅程を取つて考へれば、彼等の途中の數多き勝敗は結局皆な帳消しになつて了つて、只だ河全體の流の速度と云ふことが彼等の運命を決定する所の最後の要件になるのである。

人生に於いても亦斯くの如く、各個人の生涯の一點を取つて見れば、其事業の成敗は總て全く周圍の偶然的事情に依つて支配されるやうに思はれるが、然し各個人の生涯全體を決定するものは決して之等の偶然的事情ではない。我々は誰れしも皆な自己獨特の自然的傾向を賦與されてゐる。この天與の自然的傾向が我々各自の生

涯の事業運命を決定するのである。

一概に境遇と云つても境遇には出生前の境遇もあれば出生後の境遇もある。各人の出生後の境遇が其各人の一生涯の運命に何れ程の影響を與へるかと云ふことは、到底一朝一夕にして之を測り知ることは出來ぬ。出生前の境遇の影響に至つては、更らに一層その測定が困難である。人間の出生前の境遇は、之を三つの問題に分けて考へることが出來る。然し此の三つの問題の考察に入る前に、我々は先づ身體と其身體の中に言はゞ客住をして居る所の胚種細胞との區別を明白にする必要がある。既に第三章に述べた如く、生物の個體は總て一個のジゴートの發達せる結果である。而して此のジゴートは二個のガミート、即ち兩親の胚種細胞の結合に依つて生ずるものであるが、ジゴートの發達初期に於いて既に該胚種細胞の一部分は分れて別個の存在をなすに至る。而して此分離せる胚種細胞は、更らに次代の個體の要

素を成す所のガミートとなり、他は總て身體各部の發達分化を掌る所の要素となる。

そこで、前記の三問題に戻るのであるが、其問題の第一は、偶然的事業、即ち或る一定の機關を特別に使用すること、若しくは境遇的影響を中介する所の他の一切の方法に依つて個體の身體に與へられた變化は、果して其個體の子孫に再現する程に其個體の胚種細胞を動かすものであるか何うかと云ふ問題である。換言すれば疾病、機關の用不用、氣候、食物等に依つて與へられた結果は、果して遺傳するものであるか何うかと云ふ問題である。

第二は、直接にせよ、兩親の身體を介してにせよ、境遇は果して、子女の身體が其境遇の影響せざる場合とは異れる方面に發達する程に、其兩親の胚種細胞を變化せしめ得るか何うかと云ふ問題である。此の兩問題は一見同一事を意味するもの丶

如く思はれるが、仔細に點檢するとその間に大なる差異のあることが分る。例へば飲酒の結果肝臟硬變を惹起した人があつて、其人が右の肝臟硬變の起つた後に子供を持つたと假定する。若し前記の第一問が肯定されるとすれば、此場合、子供は自ら飲酒しなくとも、早晩肝臟硬變に冒されることを豫期せねばならぬ。之に反して前記の第一問が否定されるとすれば、飲酒に依つて生じた父の肝臟硬變は無論子供に傳はることはない。右は第一問の場合であるが、更らに此實例に依つて第二問を反譯すると次の如くなる。父の血管に流通し、斯くて其全身に滲徹するに至つた所のアルコールは、果して、父のガミートが母のガミートと合して一個のジゴートを造る場合、其ジゴートが正則の發達を遂げることが出來ず、又た其結果として子女の心身に何等かの缺陷を招致する程に、父の胚種細胞を荼毒し得るものであるか何うか。

第三は胎兒の境遇に關する問題である。卽ち、我々が母胎に宿つて居る間、母のなした一擧手一投足、母が受けた一切の境遇的影響は、果して何の點まで、母胎を出てから後の我々の生活に影響するものであるかと云ふ問題である。

右の中、第一問は簡單にあしらつて置いていゝ。境遇に依つて兩親の身體に與へた變化が遺傳すると信ずる學者は、今日恐らく一人もあるまい。

從來、此の問題の肯定に有利として認められて來た事實は極めて貧弱であつて、其貧弱なる事實すら、今日では最う一つとして批評に堪へ得るものはないのである。

然るに、第二の問題、卽ち境遇の影響は果して胚種細胞に變化を與へるか何うかと云ふ問題は、却々さう簡單に片附きさうにも見えない。禁酒論者は此の第二問の肯定に有利なる幾多の材料を蒐集した、彼等は此材料に依つて、アルコールは確かに胚種細胞を毒するものであることを主張した。彼等は、飲酒家の子女には兎かく

痴呆患者、若しくは病身者の多きことを主張した、甚しきに至つては、極く少量のアルコール使用ですら、子女の心身に甚大の害毒を傳へると主張したものもある。

私は、彼等の言ふことが果して眞理であるか何うかは知らぬ。然しながら、嚴密に批評すると彼等の推論には隨分如何はしい點がある。隨つて、其推論の歸結にも自然重きが置けなくなつて來る譯であるが、然し私は禁酒主義その事には非常な尊敬を拂つてゐる、假令その主張の形式に誤りはあるとするも、禁酒主義その事は決して斯くの如き形式の誤りに依つて永久の毀害を受けるものではない。只だ私は、若し禁酒主義の力を減殺する所の原因なるものが實際にあるものとすれば、夫は即ち極端なる禁酒主義者等が、說の眞僞を確めもしないで無暗に次の一事を主張する點に存することを公言したいのである。夫は即ち、父母が飲酒をすると夫に依つて胚種細胞が毒せられ、其結果として子女に痴呆、躁狂、その他各種の疾病が釀成さ

れると云ふ說である。

此問題の一般的方面の研究として、私は下等動物に對する實驗、殊にタワー教授の甲蟲實驗を紹介したいのである。全體、斯種の問題を取扱ふには、初めから複雜な現象を觀察してかゝるよりは寧ろなるべく特殊の事柄の實驗から出發する方が早手廻しである。勿論、科學者と雖も人間であるから、眞に公平無私の精神を彼等の間に求めることは、社會改良家や政治家の間に夫を求めると同じく、殆ど全く不可能であらう。けれども鼠や甲蟲に關する問題は、直接人間に關する問題よりも、一般に牽强附會を受ける機會が遙かに尠い。そこで、我々は禁酒論者の熱烈な主張に耳を傾けるよりは、先づ第一に此の科學者の實驗的研究を調べることが肝要である。

タワー教授は多くの甲蟲の中から、比較的恒久性の强い（即ち變化性の少い）十分に成熟せる種類のみを選び、之を寒暖濕乾等樣々の狀態の下に置いて其變化の具

合を試驗した。彼等の色や模樣は、彼等が成熟に達すると共に最早十分に發達し切つてゐたので、教授が人爲的に與へた各種の境遇は、結局毫も夫を變化せしめることが出來なかつた。斯くの如く、新たなる境遇の下に置かれた結果として、甲蟲その者には何等の變化も起らなかつたけれども。その甲蟲の胚種細胞には非常な變化が起つた。即ち、高められた溫度と乾燥された空氣との下に置かれた甲蟲は、自己よりもズット色の薄れた子を生んだ。而して、此の色の薄れたことが決して其子の活力の缺乏せる結果でないことは、彼等が其健康程度に於いて毫も他の甲蟲と異つて居らなかつたことを見ても分る、要するに之は親の胚種細胞が變化した結果である。即ち、從前よりも一層僅少な外部的色素を生ぜしめるやうな變化が、親の胚種細胞に與へられた結果である。而して此變化は又た確かに永續的であつた。夫は斯樣にして出來た子を更らに雜交させた所、其結果として矢張り之と同じやうに色

の薄れた子の出來たことを見ても分る。

右は、單に色の變化のみに關することであるが、其他の點に於いても、境遇的事情の異ると共に、夫に隨つて又樣々の著しい變化が子孫に與へられたと云ふ。

タワー教授は之等の子孫の中から、その變化の具合の同一なものを選んで互に之を交配させた。其交配の結果として多數の子が造られたが、夫等の子の特徵は總て皆な親の特徵その儘々であつたと云ふ。即ち、境遇に依つて一の甲蟲に與へられた變化は、その甲蟲の固有の身體には何等の變化を與へなかつたけれども、その固有の身體の中に言はゞ客住をして居る所の胚種細胞には非常な變化で與へられた。此變化が一代目の子の身體に現はれ、それが更らに代々の子孫に傳はつて、茲に此特徵に於いては初代の親と全く異れる一種の變種が生じたのである。

此實驗は、境遇の影響が果して胚種細胞に永久的變化を與へ得るか何うかと云ふ

問題の肯定的説明として從來試みられた諸實驗中、恐らく最も確實なるものゝ一であらう。然しながら、此實驗に依つて示されたる如き事實を確かに一般的の現象として承認する生物學者は、今日の所まだ殆ど絶無と云うて差支ない。故に、單に之だけの事實に依つて右の第二問が直ちに悉く肯定されるものと思つては大間違である。兎にかく、此問題の最後の肯定は、將來更らに幾多の確實なる事實が蒐集され得る時まで保留することにしたい。

次に第三の、姙娠中の母の動作、習慣、境遇等は果して何の點まで胎兒に影響を與へるかと云ふ問題は、科學としての人種改造學中最も重要な一部門を成すのものであるが、只だ問題が餘りに純醫學に傾いて居るので、私は玆で十分に夫を論究することの出來ぬのを遺憾とする。

然し、之等の諸原因の外にも尚ほ個人の誕生以前に働き、其個人の將來の性質を

或る程度まで、又た何等かの方法に依つて、決定すると見做されて居る所の特殊の條件がある。其條件の一つは誕生の順序と云ふことである。即ち、比較的先に出來た子供と比較的後から出來た子供との間に、心身の性質上何等かの差異があるか何うか、又た差異があるとすれば夫は果して如何なる差異であるかと云ふ問題である。之に就いてピアソン教授は、長男長女、若しくは次男次女は、他の比較的終りに出來た子女よりも一般に結核病、神經病、躁狂等に冒され易く、又た各種の犯罪に陷り易き性質を有して居ると云ふた。若し之が果して事實であるとすれば、今日現に行はれて居る所の家族員の減少と云ふ現象は、人種の將來に對して直接有害の影響を與へるものと見做さねばならぬ。何となれば、一定の家族に於いて長男長女、若しくは次男次女の占める百分率は、其家族員全體の數が減ずれば減ずる程ますます增騰する理窟であるから。

ピアソン教授は次の考察に依つて前記の結論に到達した。英國フロッドシアムにクロスレイ治療院と云ふがある。此治療院に收容されて居る肺結核患者三百八十一名は大抵皆なマンチエスターの中流以下の家庭に屬するものであつたが、中には又たリバープル及び其附近の中流以下の家庭から送られたものもある。ピアソン教授は先づ彼等の家族中を精密に調査した。そして、右の三百八十一名の收容患者中、百十三名は長男若しくば長女、七十九名は次男若しくは次女であることを發見した。尙ほ之等の患者に其の同胞（死亡者をも含む）の總數を加へて、三百八十一の家族中、長男若しくは長女の數が三百八十一名、次男若しくは次女の數が三百六十六名に上ることを發見した。今、之等の數を各家族の平均子女數にて割れば、各家族から手當り次第に一人宛を取つて三百八十一名を揃へた場合、その三百八十一名中長男長女の占める數と次男次女との占める數とに近い數が得られる譯である。即ち長男

長女が六十七、次男次女が六十四である。然るに、上記の三百八十一名の收容患者中、實際長男長女の占める數が百十三、次男次女の占める數が七十九であることは既に述べた通りである。斯くの如き顯著な差異は、到底之を偶然の結果と見ることは出來ぬ。之は何うしても、肺結核と長男長女、次男次女との間に存する一定の因果關係の現はれと見ねば解釋のつかぬことである。尙ほ三男三女以下の子女に於いては、此差違は全く反對であつた。即ち、右の三百八十一名の患者中、實際三男三女以下の地位に在るもの、數は、各家族から手當り次第に一人宛を取つて三百八十一名を揃へた場合に豫期される數よりも遙かに少なかつた。

躁狂者や犯罪者の家族を調査することに依つて得られた結果も亦、矢張り之と同一の事實を語つて居る、兎にかく、誕生順位と結核、躁狂、犯罪等との間に、何か深い關係のあることは爭はれぬ事實であるが、然し夫が果して如何なる原因から起

つた關係であるかは今の所まだ十分に分つてゐない。或る學者は、比較的後から生れた子女は、一般に嬰兒時代の死亡率が高いので、長じて結核病や犯罪の犧牲となる率が低いためであると云ふた。又たプルユーッ博士は此關係を次の如く説明した。

『一定數の子女の中には父母の早世した子女が可なりにある。而して、之等の子女は大抵皆な誕生順が上なので、之が更らに他の早世せざる兩親を有する子女の中の誕生順の比較的上なものと合して、誕生順の上な子女の率を益々高からしめるのである。而して早世する父母は一般に病身であるから、その子にも亦病身者が多い譯である。誕生順の上な子女の間に、結核、躁狂等に冒されるものゝ比較的多いのは全く之がためである』

尙ほ左の、誕生順の比較的上な子女よりも誕生順の比較的下な子女の方が一般に嬰兒時代の死亡率が高いと云ふ説に就いては、プリユーッ博士は此説が果して

一般的であるか何うかを疑ふと云つた。ガイスラー氏は下層階級に屬する二萬六千人の子女を調べ、生後一ケ年以内の嬰兒の死亡率は四男四女迄が二割乃至二割三分五男五女が二割六分更らに十二男十二女が六割であることを發見した。然しプリューッ博士に依ると、斯くの如き此死亡率の差の生ずるは、一般に下層社會に於いては家族員が增せば增す程、經濟上の壓迫を感ずることが甚しいからである。即ち後から生れた子程ぞんざいな待遇を受ける結果である。然るに上流社會の家族に於いては、如何に子女の數が增しても、其ために經濟上の壓迫を受けることがないから、彼等は總ての子女に對して一樣に手厚き養育を與へることが出來る。隨つて上流社會の子女は其の誕生順の上下に依つて死亡率の差を示すやうなことが殆どないのである。

之等の事情を斟酌すると、先づ子供がその誕生順に依つて直接著しく影響さ

れることは無いと見るが安全であらう。

此の誕生順位の外に、尙ほ胎兒の境遇的條件と見做されてゐる事柄が二つある。一は、再婚に依つて生れた子は、その母の最初の良人の特徴に依つて著しく影響されると云ふ說から出たのであるが實際に此說を立證し得るやうな事實は今の所まだ十分に集められてゐない。今一つは、姙娠中に受けた母の印象が其儘子供の心身に傳はると云ふ說である。例へば、姙娠中深く思ひつめた事があるとか、或は何か非常な激動を受けたことがあるとかすると、その印象が胎兒に傳はつて何處かに異常な特徴が現はれる。然し之は決して、母の受けた印象が直接胎兒に傳はる爲めでなくて、寧ろ母の感情的經驗が最初其の循環機能上の組織に影響を與へ夫が更らに胎兒の營養に反動する結果と解するが至當であらう

第七章　淘汰働因

(一)相對的出產率と死亡率

我々の子孫の本有的性質を、或は肉體的に、或は精神的に、改善若しくば阻害する所の淘汰的働因は、特殊の國民、人種、階級等の數、又は一定の善性質若しくば惡性質を有する人々の數を比較的急激に增減せしめる所の諸働因である。斯くの如き働因は總て、間接に直接に、相對的出產率若しくば相對的死亡率を確立するものであつて、彼等が人種改善若しくば人種毀害に對する眞偶の淘汰働因として作用し得るのは、全く此の相對的出產率若しくば相對的死亡率の確立に依るのである。而して之等の働因の研究は先づ出產率及び死亡率の比較考察から着手するが順序である。

普通、人口調査家が出産率とか死亡率とか云うて居るのは、人口千に對する一年間の出産數若しくは死亡數を指すので、例へば、或る國の一定年度に於ける人口を二千萬とし、その年度の出産數を五十萬、死亡數を二十五萬とすれば、その國がその年度に示す出産率は千分の二十五、死亡率は千分の十二半と云ふことになる。而して、一國の死亡率が出産率に依つて超過される度合を其國の自然的增殖率と云ふ。自然的增殖は必しも事實上の增殖を意味しない、何となれば、外への移住及び外からの移住も亦後者を決定するからである。

各國が年々幾何の人口を世界の總人口に加へつゝあるかを知るには、各國が年々幾何の自然的增殖を遂げつゝあるかと調べるに越したことはない。然るにこの自然的增殖なるものは、事實上嚴重に出産死亡の調査を厲行して居る國でなくては分らぬ。之等の國の中で、今日最も增殖率の高いのはニュージランドである。即ち一九〇九

年度の調査に依ると同國の增殖率は實に千分の一八・一であつた。ニュージランドに次いでは、ニューサウスヱールス及びクイーンランドが最も高い。即ち前者は千分の一七・三、後者は千分の一七・五であつた。南濠洲は之よりも稍〻低く、千分の一五・四であつたが、更らに稍〻下つて普國が千分の一四・八、ビクトリアが一三・四であつた。英蘭、エールス、スコトランド、伊太利、ハンガリイ諸國は、何れも千分の一一乃至一二であつたが、スペインは九・二、愛蘭は六・三、佛蘭西は〇・三であつた。

右は單に各國增殖率の差異を示したに過ぎぬが、我々は更らに之等の差異を生せしめるに至つた根本の原因を調べる必要がある。出産率の遞減と云ふことは今日總ての文明國共通の現象と見做されてゐるが、此現象が始めて現はれた時期は國に依つて夫々皆な違ふ。隨つて、各國の之がために受けた影響も亦決して同一でない。

佛蘭西は事實上全く停止の狀態に在ると見做されて居る程に增殖率が低い。歐洲に於いて最初、出產減少の徵候を示したのは佛蘭西である。そして、事實上出產減少に於いて最も極端に走つたのも亦佛蘭西である。同國に於いては斯く出產率の減少せるに拘はらず、死亡率は其割に減つてゐない。

之に反して、濠洲諸植民地は、前記の數字に依つて見ても分る通り、增殖率に於いては總て上位を占めて居るのであるが、然し彼等の增殖率が一般に斯く高いのは出產率の高いためと云ふよりも寧ろ死亡率の低いためである。然らば何故、彼等の死亡率が斯く低いかと云ふに、夫は濠洲諸國の氣候風土地理食物等が一般に他の諸國よりも遙かに衞生的なるが爲であることは言ふまでもないが、然し又た一方に於いて、强壯なる年少者が年々非常な勢を以て其處へ移住し來る事も慥かに其の一原因をなして居るに違ひない。ハンガリイの出產率は此の三十年來著しく遞減した傾があるが、夫でも今日人口調査を厲行してゐる各國の中では矢張り依然として第一位を占めてゐる。其割りに同國の增殖率は高くない。何故と云ふに、同國は出產率も高いが、夫と又た同じ比例にて死亡率も高いからである。卽ち同國の死亡率は千分の二五・一で、ニュージランドの死亡率(千分の九・二に)比する時は優に二倍半を超えてゐる、同國の增殖率が、出產率に於いても死亡率に於いても自分より千分の一以上低い英蘭と略ゝ同位に在るのは全く之がためである。

次に、英蘭と普國とを比べて見るに、增殖率に於いては後者が千分の三・七だけ高い。然るに實際の出產率に於いては、前者は千分の二五・八、後者は千分の三一・八であるから、正に六・〇の差を示して居る譯である。卽ち出產率に於いては六・〇の差があるが、實際の增殖率に於いては僅々三・七の差を示すに過ぎぬ。して見ると、此兩差の差、卽ち二・三と云ふ數は正に他の原因に依つて償はれるものと見ねばなら

ぬ。其原因は即ち普國の死亡率(殊に嬰兒死亡率)の高きことである。ハヱロック、エリスは其著『社會的衞生』に於いて、獨逸の增殖率は數年を出でずして英國の增殖率に追越されると云ふて居る。伯林の出產率は現在もう既に倫敦のそれに敗けて居る。大體について言へば、獨逸諸都市に於ける一家の平均子女數は、英國に於ける同大さの都市の一家の平均子女數よりも少ない。

尙ほ今一つの面白い比較は、白人種と黃人種との比較である。所謂黃禍を怖れる人々は、何ぞと云ふと支那人を例に取つて、彼等は年々非常な勢を以て增殖しつつある、彼等は歐洲勞働者の得る賃金の四分の一を以て可なりに安樂の生活を營むことが出來ると主張する、黃禍論者の此の驚怖が果して事實であるとすれば、我々は只だ、結局黃人種をして漸次に而も確實に白人種と地位を轉倒せしむるに至る所の一個の平和的侵略を豫期するより外はない。然らずんば我々は、一個の殘忍な

る戰爭的侵略を豫明せねばならぬ。之は前の平和的侵略の防止策として過激なる移民禁止法の厲行せられたる場合、必ず其當然の結果として行はれるに相違ない。

然しながら、支那の人口が事實上果して黃禍論者の怖るゝ如く增殖しつゝあるか何うかは疑問である。言ふまでもなく、支那では人口の調査が厲行されて居らぬ。隨つて、確實な統計に依つて支那の人口增殖率を調べる望は絕對に無いのであるがハヱロック、エリスが他の方法に依つて研究した所に依ると、前記の如き侵略の驚怖に根據を與へる所の事實は殆ど絕對に存在して居らぬ樣である。ハヱロック、エリスは、多年支那で開業して居る所の幾多の醫師から次の如き證明を得た。支那には子供が多いが、無事に成長するとの出來るものは至つて少ない。支那の衞生設備は一般に極めて不完全である。夫に支那では嬰兒殺しと云ふことが旺に行はれる。此結果として、支那人の死亡率は非常に高い、或る信賴すべき筋の調査に依ると、

支那の嬰兒死亡率は全產兒の九割に上ると云ふ、尤も西洋思想の普及と共に之等の狀態は將來益〻改善されて行くに違ない。其結果として、死亡率も亦或る程度までは低減するであらうが、其代はりに又た西洋流に出產率の低減することも確かである。何れにしても、支那の人口が黃禍論者の懸念する程爾く無鐵砲に增殖するものでない事は爭はれぬ。

世界が日本人に依つて埋められるだらうと云ふ說は、之よりも尙更ら疑はしい。日本の增殖率は一九〇一年の調べに依ると千分の三六であつたが、其後益〻遞減の徵がある。夫と同時に死亡率は千分の二四に上つた。故に日本の自然的增殖率は英蘭と餘り違はない。日本の死亡率が何故爾く昂騰したかと云ふに、夫は主として日露戰爭のお蔭であるらしい。若しさうだとすれば、今後日本の死亡率は再び昂騰する譯だが、然し其場合と雖も、日本の自然的增殖率が今後著しく高まるやうなことは恐らくあるまい。

之等の考察に依つて、我々は次の一事を知る。夫は現に各國の人口が出產力に依つて增殖しつゝある程度を測定することは差して難事でないが、來るべき百年に於いて地球上の各人種の割合に如何なる變化が生ずるかを豫想することは全く不可能だと云ふ事である。出產率の遞減と云ふことは、前にも云ふ如く、世界の各文明國に共通の現象と見做されて居る。而して、此現象の現はれ初めた時期、及び其遞減の率が、國に依つて夫々皆な違ふことは既に前述した通りである。之に依つて、我々は我々が今現に一の過渡期に置かれて居ることを知る。將來、出產率と死亡率とが不變になる時代があるであらうが。若しあるとすれば、其時代は何時の事であらうか。我々は今の所、到底まだ之等の問題に明答を與へることは出來ぬ。其明答が與へられぬ以上、我々は到底豫言を信ずる譯には行かぬ。

出産率遞減の原因に就いては從來樣々の研究が行はれた。此問題に就いて先づ起る疑問は、出産率の遞減は果して結婚減少の結果であるか何うかと云ふことである次に、夫は一般に結婚年齡の上つた結果であるか何うかと云ふ問題が起る。更らに夫は出産に對する男女の生理的能力の減少せる結果であるか何うかと云ふ問題も起る。最後に、自己の家族員を制限しやうと云ふ兩親の熟考的決意が此結果を生ぜしむるに至つたのでは無からうかと云ふ疑問も起る。然し玆で一々之等の問題を細論する餘地はない。右の四つの要素が皆揃つて同時に働く場合もあるには違ないが、然し大體に於いて、右の最後の問題に屬する自己の家族員を制限しやうと云ふ兩親の意識的努力が、最も優勢な要素であることは爭はれぬ。然し何れの要素が重きをなすにもせよ、我々が更らに一歩を進めて問ひたいのは、之等各要素の由來如何と云ふことである。例へば、人々は何故自己の家族を制限しやうと努めるかと云ふ

問題が起る。或る人は其原因を彼等の利慾心に歸した。即ち、子供が殖えれば贅澤が出來なくなる。必要な快樂も削らねばならぬ。そこで、彼等は成るべく子を生まぬやうな工夫をする。然るに又た或人は、利慾心よりも寧ろ社會的意識、即ち自己の子女及び社會全體に對する責任の感の發達に重きを置く。中には又、此原因の一部を工場法の實施に歸するものもある。即ち、工場法の厲行に依つて小兒の勞働が著しく制限された爲め、勞働階級の父母に取つては子女はもう從前の如く重なる財源を成さなくなつた爲めであると說く。

之等の理由は總て皆、幾分の眞理を包藏して居るかも知れぬ。色々の動機が色々の人々を驅つて同時に同一事をなさしめる場合があるかも知れぬ。人間が純一の動機に依つて動くことの稀なるは誰れしも良く知る所である。

一國民を組成する人種的要素の相對的增減と云ふ問題は從來餘り研究されて居ら

なかつたが、然し夫が事實上極めて重要な問題であることは言ふまでもない。由來異人種混合の最も激しく行はれる國は斷えず移民の流入を受けて居る國である。隨つて、斯くの如き國に在つては、前記の、人種要素の相對的增減と云ふ問題の影響を感ずることが最も痛切である。合衆國に於いては、本來同國で生れた人々の出產率は一般に極めて低く、其家族も亦至つて小人數の方であるが、之に反して同國移民の家族は一般に大人數で、出產率に於いても本來の合衆國人よりは遙かに高度を示して居る。隨つて、合衆國の人種增殖は移民に依つて二重の貢獻を受けて居る譯である。之に就いては、合衆國全體の統計と云ふものが無いので、一般的に斷言を與へることは困難であるが、然し二三の州に就いて云へば、最早既に可なりに詳細な統計を有して居るものもある。例へば、ホフマンは一九〇五年の人口調査表に基いて、ロードアイランド州に於ける人種要素の相對的增減を算定した。同氏の算定、

に依ると、ロードアイランド州の住民一夫婦の間に生る子女の數は本來の合衆國民に於いては平均二・〇六、移民に於いては平均三・三六であると云ふ、更らに此後者を各國に就いて內譯すると、佛領加奈陀人が平均四・四二、露西亞人が平均三・五一、伊太利人が平均三・四九、愛蘭人が平均三・四五、スコットランド人及びエールス人が平均三・〇九、英蘭人が平均二・八九、獨逸人が平均二・八四、瑞典人が平均二・五八、英領加奈陀人が平均二・五九、波蘭人が平均二・三一である。如何なる方法に依つて既婚婦人を比較して見ても、又た如何なる點(例へば年齡の差)を酌酌して見ても、同州の移民が本來の合衆國人よりも遙かに多產であると云ふ事實は動かない。同州の移民は出產率の點に於いて斯樣に本來の合衆國人を凌いで居るに拘はらず、嬰兒死亡率の點に於いては、兩者の間に殆ど何等の差異も認められなかつた。

前記人口調査表の編纂された當時に於いて、移民の子女の中無事に成長を遂げ得たものゝ割合は平均七割五分七厘であつたが、本來の合衆國人に於いては平均七割九分であつたと云ふ。即ち嬰兒死亡率に於いて後者の方が平均三分三厘低い譯であるが、之を前の出産率の差五割に比較すると、兩者の増殖率は正に四割六分七厘の差を示すことになる。而も同州に於ける既婚婦人の殆ど半は移民婦人に依つて占められて居る。

一八七五年及び一八八五年に於けるマサチユセツ州の人口調査表も亦、之と同樣の比較を可能ならしめるやうに編纂された。同州の既婚婦人が有する子女の數は、本來の合衆國人に於いては、平均二・七、移民に於いては平均四・五であつた。之を前記のロードアイランド州に比べると、移民に於いても本國人に於てもマサチユセツ州の方が遙かに高いのであるが、之は決して兩州の出産率に根本的差異あるがため

でなく、近年に至つて合衆國の出産率が一般に遞減して來た爲めである。一八八九年代に於いては、ロードアイランド州の子女數は決して前記の數に示される程顯著ではなかつた。

出産力の最も面白き對照は、本國に在住せる佛蘭西人と加奈陀に移住した佛蘭西人の子孫との間に示される出産率の差異である。亞米利加ロードアイランド州の各國移民中で佛領加奈陀人が最も多産であることは、前記の數字に依りても明であるが、加奈陀その國に於いても佛蘭西人は英國人よりも遙かに急速力を以て増殖して居る。此對照の原因中最も眞に近いと思はれるのは、加奈陀に於けるローマ正教の影響が本國の佛蘭西に於いてよりも遙かに強いと云ふ事實である。

新開國若しくば新開植民地に流入し來る移民の數及び性質は、人口の比較的稠密せる老國家の自然的増殖率に依つて著しく決定される。出産率減退の傾向が現は

れて以來、歐洲諸國の自然的增殖率に著しき變動のあつたことは既述の通りであるが、此自然的增殖率の變動は年々合衆國に流入し來る移民の國籍關係に非常な影響を與へた。ハヱロック・エリスに依ると、合衆國移民の九割は最初北方歐羅巴の各國民に依つて占められて居つたが、一八九〇年以後この比例は漸次低減して、今では中央南方及び東方歐羅巴人が其の大部分を成して居る。

然るに、彼等が斯樣にして立ちのいた所の歐洲諸國も亦、曾ては他の諸國から流入し來つた所の移民に依つて充されてゐたので、歐洲諸國民中眞に單一の人種から成立つて居る國民は絕對に無いのである。彼等は何れも、不完全に混和された人種要素の團合に外ならぬ。而して、之等の人種要素は又た絕えず增減し、斷えず其相互の關係を變じて居るので、之等の人種要素に依つて組成せらるゝ國民も亦、斷えず其精神的、道德的及び物質的性質の變化を受けて居る。而して、之等の變化が又

た同時に彼等の歷史に反影することは言ふまでもない。ホエタム氏の『歷史に對す人種の影響』は歐洲史の或る種の方面を此筆法で說明せんとした思索的試みの中最も注目すべきものゝ一つである。

ホエタム氏は、有史以後に於ける歐洲民族の人種要素を解剖して次の三種に大別した、第一は地中海人種である。『此人種の特徵は身體が小造りで、頭蓋骨が長く顏色と頭髮とは全體に黑みがゝつて居る。彼等は擧動が活潑で聚合性に富み、落着のない輕快な步振りをする。』今日此人種を最も純粹に保存して居るのは、愛蘭、エールス、コーンウオール、及西方スコットランドのみである。

第二はアーメノイド人種と云ひ、中肉中脊で、肌色は中庸を維持し、頭蓋骨は一般に丸い方である。

第三は北方人種と云ふ。此人種の特徵は頭蓋骨の長きこと、金髮碧眼なること、

剛建にして決斷力あること、忍耐心に富み冒險好きなること等である。北方人種の最も純粹なるものは今日スカンジネビア半島、及び蘭英兩國の北海に瀕した地方に於いて之を發見することが出來る。

古代に於いて希臘羅馬の隆興せるは主として、北方人種をして支配權を掌握せしめるやうに此の三人種が釣合よき混合を遂げた結果であるとホエタム氏は言つて居る。然るに其後、此の北方人種は或は戰爭の結果として、或は出產率の遞減せる結果として、或は異人種間の結婚の結果として、漸く其數を減ずるに至つた。斯くの如くにして、希臘羅馬の衰頽の因が造られたのである。而して其後、北部伊太利に文藝復興の起つたのも亦矢張りホエタム氏の說に據ると、後年羅馬帝國に侵入せる蠻人に依つて供給された地方人種のお蔭である。

然るに、歐羅巴の今日の社會事情は北方人種よりも寧ろ地中海人種の發達に適して居る。蓋し歐洲諸國に於いて、出產率の最も低き階級を組成する人種要素は大抵皆な此の北方人種である。之に反して、地中海人種は多く、都市に向つて發展してゐる。而して歐洲諸國の人口が現に益ゝ都市に向つて集中しつゝあることは云ふまでもない。

私は次に人種要素の相對的增減に直接關係ある社會階級の問題に移らう。今日の社會に於いては、優等階級と云へば直ちに富有階級を意味するものと見て差支ない。然るに、此富有階級は出產率の點に於いて、遙かに貧困階級に劣ると見做されて居る。此事實は既に六十年以前に於いて認められたのであるが、其後近來に及んで尙ほ一層甚しくなつた傾がある。貧富兩階級の間に於ける出產率の差が近來斯く著しくなつた原因は、言ふまでもなく、六十年以前に無かつた事情が近來新たに發生した爲めである。

貧困階級の子女は一般に富有階級の子女よりも早く結婚する傾がある。之は今も昔も變はらないが、六十年以前に於いては、單に此一事が貧富兩階級の間に於ける出産率の差の主一原因であつたやうに思はれる。然るに今日では、此原因に依つて生ずる差異を度外に置いても、尙ほ他に一個の著しい差異が殘る。此の差異は歐羅巴の比較的重要なる諸都市に於いて觀察された。バーチロンは巴里、伯林・倫敦ヴイエンナ四都市の各地區に就いて、十四歳より五十歳に至る婦人各千名に對する年々の出産數を調べて次の如き結果を得た。

	巴里	伯林	キーン	倫敦
最下低の貧民窟	一〇八	一五七	二〇〇	一四七
貧民窟	九五	一二九	一六四	一四〇
中流階級の住んでゐる町	七二	一一四	一五五	一〇七
比較的大きな中流階級の住んでゐる町	六五	九六	一五三	一〇七
富豪の住んでゐる町	五三	六三	一〇七	八七
大富豪の住んでゐる町	三四	四七	七一	六三
平均	八〇	一〇二	一五三	一〇九

尙ほ、大都市の各地區に於ける出産率が、其の各地區の社會的及び經濟的事情に對して有する關係に就いては、最近ヘロン、ニューショルム、スチーブンソン三氏が極めて有益なる研究を公にした。

ヘロンはガルトンの統計的方法を應用して、倫敦に於ける各地區の出産率を研究した。之に依つて彼は、倫敦に於て最高度の出産率を有するのは、矢張り前表の示す如く、最下低の貧民窟の婦人であることを發見した。倫敦の最低貧民の特徴は、住民の唯一の財源が不熟練勞働であることゝ、質屋が多いことゝ、肺結核が蔓つて居ることゝ、嬰兒死亡率が高いことである。然し、此の最後の嬰兒死亡率の高いことは決して此地區の出産率の高度を埋合はす程に著しくはない。倫敦に限らず

總て嬰兒死亡率の最も高き所に於いては、既婚婦人各一人に對する二歳以上の子女の平均數も亦隨つて最も多い。老幼を問はず、死亡の機會は比較的貧民窟の住民に多いが、夫でも彼等の自然的增殖率は事實上常に上中流階級の自然的增殖率よりも高度を示してゐる。

ニューショルム及びスチープンソン兩氏の統計から得られる結論も亦、根本に於いては之と同一である。然し兩氏の研究は或る點に於いて、一層有益と思はれる節もあるので。私は夫も併せて茲に紹介して置うと思ふ。

彼等は先づ家族百に對する婢僕の平均數を標準として、全倫敦府を六個の組に大別した。彼等は次に此各〝の總人口率を算定して次の結果に到達した。

組	家族百に對する婢僕數	出産率
一	一〇	三四・九七
二	一〇—二〇	三八・三一
三	二〇—三〇	二五・九九
四	三〇—四〇	二五・八三
五	四〇—六〇	二五・一一
六	六〇　以上	一八・二四

之等の數字に依つて示さるゝ差異が、何の點まで、各組に於ける結婚婦人の百分率及び夫等の婦人の結婚年齡に負ふて居るかを發見せんがために、彼等は更らに、之を修正して次の如き表を造つた。此修正の目的は各組の總人口に對する各年齡の妻女の比例が全英蘭及びヱールスに於ける其比例と同一であると假定して、其場合各組が幾何の出産率を示すかを求めることであつた。

組	出産率
一	三一・五六
二	二五・八二
三	二五・六三

四　二五・五〇
五　二五・三六
六　二〇・四五

此修正の結果として、最極端の兩組・即ち第一組と第六組との差は幾分縮少されたことになるが、之は結婚婦人の百分率と夫等の婦人の平均結婚年齡との點に於いて、前記兩組の間に右の縮少を可能ならしめるだけの差異があつた爲めの結果と見るの外はない。尙ほ、他の四組に就いては、該修正の結果として何れも皆な、殆ど同一の出産率を示すに至つた。而して、此出産率が大體に於いて、最極端の兩組の中間を維持して居ることは前表の示す通りである。之に依つて我々は、婢僕數の漸次に上ると云ふことは（即ち生活規模の漸次に上ると云ふことは）必しも出産率の漸騰を招致するものでないことを知る。

右の修正表に依ると、倫敦の市民が劃然と三個の階級に分たれることが分る。即

ち第一は、前記の第一組に屬する極貧階級、第二は、前記の第六組に屬する大富豪階級、第三は、前記の他の第四組に屬する中流階級である。右の中、極貧階級は出産率が最も高く（即ち百に就いては三一・五六）倫敦市民の約四分の一を占めて居る。大富豪階級は之に反して出産率が最も低く、百に就いて二〇・四五の割合であるが、中流階級は此兩階級の中間、即ち百に就いて二五・八二乃至二五・三六を示して居る。尙ほ我々は此の修正表に依つて、十年乃至十二年前（此表は一九〇六年に發表されたものである）倫敦府の各方面に於いて、何の點まで家族制限の習慣が行はれたかを窺知することが出來る。若し今日之と同一の調査が行はれるとしたら、第六組と第一組を除いた他の四組との出産率の差は決して斯くの如く甚しくはないであらう。何となれば家族制限の習慣は、今日では單に上流階級のみならず、中流階級の下層と勞働階級の上層との間にも亦、大分普及して居るやうであるから。

然し、人種改造學が直接關係する方面は、之よりも寧ろ前記各階級の相對的增殖率如何と云ふ問題である。各階級の相對的增殖率を知るには各階級の出産率から死亡率を控除すれば良い。左記の數字はニューショルム、スチーブンソン兩氏が此方法に依つて算出した相對的增殖率である。

組	出産率
一	一六・五六
二	一三・八九
三	一一・四三
四	一三・八一
五	一〇・二九
六	五・七九

此表で注目されるのは、第一組と第六組との增殖率が著しく隔つて居ることである。第四組はワンヅオース、リユインアム及び倫敦市を包括するものであるが、

此第四組が、增殖率の點に於いて遙かに他の第三、第五兩組を凌駕して居る所以は後者に比して前者の死亡率が遙かに低いお蔭である。

此表に依ると、他の都市のことは知らず兎にかく倫敦市に於いては、最貧階級が(倫敦市に於いては百萬以上の最貧者が居る)他の上中流階級よりも遙かに高率を以て增殖しつゝあることが分る。

一九〇六年に於ける佛蘭西の人口調査表も亦、各階級の相對的出産率を暗示し得るやうに造られた。マーシ氏は此の人口調査表に依り、二十年間同棲を續けたる父母、若しくば六十歳乃至六十五歳の戸主を有する家族、百に對する子女の平均數を標準として各階級の比較を行つた。其結果氏は、『出産率に對する社會的地位・社會的境遇及び收入等について、從來各種の研究に依つて與へられた結果を十分に確め得た』と公言してある。氏の研究は此他にも尙ほ樣々の有益な暗示を齎らしたが、

私は便宜上それを一々茲で紹介することは見合せる。

兎にかく、前記の事實は最も愼重なる考案を要する問題であつて、我々は、決して輕々に之を放擲し去つてはならぬ。蓋し、遺傳され得る精神的及び肉體的性質に於いて、下層階級は果して上中流階級よりも劣つて居るか何うか、又た劣つて居るとすれば果して何の程度まで劣つて居るかと云ふ問題は、今日の所まだ十分には分つてゐないので、我々は此點について是非とも明確な解決を求めなければならないのである。從來蒐集されたゞけの材料に依ると、上中流階級の方が一般に卓越して居るやうに思はれる。之は人間の精神能力が遺傳するものである以上、所詮已むを得ぬ結果と見るの外はあるまい。如何なる方面へ出るにしても、立身出世の機會はザラ程ころがつてゐるが、さて其機會を掴むと云ふ段になると、精神的能力の低い人では到底何事も成し得ない。人間をして眞に成功の機會に乘ぜしめる所の資格は

或る程度までは確かに各自の精神的能力に依つて定るのである。

成功の機會が反社會的の道德性を最負する場合はあるかも知れないが、薄弱なる理智が成功の機會に依つて庇護される場合は絶對にない。掠奪的の大富豪と强盜との間には倫理的の資格に就いて、恐らく何等の差別もないであらうが、精神的能力から云ふと、後者は迚も前者に及ばないのである。尤も中には、別に之ぞと云ふ程の能力もなく、只だ全く運のお蔭で立派な地位名分を贏得る人もあらう。又た辛辣苛酷な性質の足りない爲めに、却つて成功の機會を失するものもあらうが、然し單に成功不成功を標準として、最初同時に同じ地位から出發した人間を何個かの部類に分つとせば、現在社會的地位の最も高き部類に屬する人々が、大體に於いて最も多量の智的能力を有し、現在社會的地位の最も低き部類に屬する人々が、大體に於いて最も少量の智的能力を有することは爭はれない。

各社會階級の相對的知識能力如何と云ふ問題に對して最後の解決を與へ得るため、には我々は先づ其解決を可能ならしめる樣な事實を集めなければならぬ。而して、此事實の蒐集に就いては、我々は實驗心理學者の研究に最も望を屬して居る次第であるが、從來、實驗心理學者の提供した材料は、まだまだ到底此問題に就いて一個の說を立て得る程に十分ではない。此材料が十分でない以上獨斷的の主張は出來得る限り避けるに越したことはない。然し斷言の出來ぬことは認めながらも、尙ほ、大體の想像に依つて動くが人間の常であるそして我々が大體想像する所に依ると、人類の增殖に對して現在不當の貢獻を與へて居るのは、他の階級に比して智的能力が比較的劣つた階級の樣である。

前記の如き出產率の差はホンの一時の現象であつて、將來家族制限の習慣が上流から下層に普及し來るに隨つて、出產率は全國に渡つて結局平均に歸するであらうと主張する人がある。成る程、さう云ふ事情は慥かにある。然し夫が將來果して一個の事實となつて現はれ來るか何うかは問題である。

(二)特殊の原因に依る淘汰的死亡

ダブルユー・シー・ウエルス博士は、一八一八年、ニーグロー(黑人)とムラットー(黑人と白人との雜種)とが或種の熱帶病に對して全く免疫であることを發見した。博士は此事實を說明して、之は畢竟該病に對して抵抗力なきものが死亡に依つて淘汰される結果だと云た。詰り、家畜が養殖家の意識的淘汰に依て改善されると同じ理屈で、巧妙なる疾病の淘汰行動が、特に一定地に適合せる人類變種を造るのである。

其後ライド博士も亦、之と同一の說を發表した。彼は其著『遺傳の原理』に於いて疾病に依つて釀される死亡が一個の淘汰働因であることを力說した。疾病に對する抵抗力が若し身體の遺傳され得る性質に基いて居るとすれば、言ふまでもなく其の

疾病に堪へ得た個體は右の抵抗力を自己の子孫に傳へる。そして此の子孫が更らに同一の疾病に襲はれた場合には其中で比較的抵抗力の弱いものが斃れて、該病に對する武備の比較的完備せゝ個體が多く子孫を殘す。

ライド博士は尙ほ、此淘汰的死亡の働因たる各種の疾病の性質に就いて、次の如き說明を與へた。先づ第一がマラリアである。元來マラリアに對する人間の進化は他の多くの疾病が齎らす進化よりも遙かに顯著である。夫には二つの理由がある。第一は、マラリア菌の繁生する地方に於いては、該菌に對して免疫となつて居る個體でなくては到底十分に其襲擊を免れることが出來ぬ。又た一旦感染を受けた曉には、只だ十分に抵抗力を具備した個人のみが死を免れることが出來る。隨つて、不適者は從來一人も殘らず削り去られて了ひ、只だ免疫の個體のみが現存してゐる譯である。第二は、マラリア病は極めて急性にして顯著なる特徵を有して居るので、

各人種の個人に就いて其影響を比較對照し、從來マラリア病に接近して居る人種と然らざる人種との間に存する抵抗力の差異を見極めることが比較的容易である。セイロンに於けるマラリア死亡者の數は人口千に就き四三・九の割合であるが、ライド博士は之を更らに各人種に就いて內譯して次の結果に到達した。

ニーグロー	一・一
印度土人	四・五
マレイ人	六・七
セイロン土人	七・〇
歐洲人(英國人)	二四・六

之は單にマラリア病のみならず、結核病に於いても亦同樣である。即ち、結核病に對して懇意な人種程、それに對する抵抗力が又隨つて强い。

之等の事實に依つて見ると、疾病が死亡を通して與へる淘汰には直接普遍の人種改造的價値と云ふものが毫も無いやうに思はれるが、然し疾病には確かに或る程度までは、自己の造つた境遇に人間を順應させる力がある。疾病が人間に與へる影響と、その疾病を驅逐するために服された藥劑が其疾病の釀成者なる顯微鏡的有機體に與へる影響とは餘程よく似てゐる。前者に於いては、黴菌の造つた毒に人間が抵抗し、後者に於いては、人間の造つた毒に黴菌が抵抗する。

淘汰的死亡の原因としては、疾病の外に尙ほ戰爭を擧げることが出來る。ハエロック・エリスは戰爭を批評して次の如く言つた。『戰爭心の强い國民は結局自滅に了る。戰爭好きの種族、及び戰爭好きの種族より成る國民は當然に剿絶されて、天下は結局平和者の手に歸する。只だ戰つて然る後逃げる所の思慮者のみが、生きて再戰を期することが出來る。』私は此說には反對である。斯くの如き『思慮者』は『戰

つて然る後逃げる』ことに依つて却つて戰爭を長びかせ、戰爭を長びかせることに依つて、益〻其犧牲を大ならしめるのである。之に反して、向ふ見ずに大膽に戰ふものは、其指導の適當なる限り必ず勝を征し得るので、其結果戰爭は割合に早く片が附く。戰時に於ける人命の犧牲は、戰死者の好戰的精神よりは、寧ろ不完全なる衞生設備と盲目なる指揮官の失策とに依つて釀される場合の方が多いのである。

ケロッグ教授は其著『人種改造學と軍國主義』に於いて、大規模な戰爭には一般に交戰國民の肉體的性質を墮落せしめる傾向あることを論じたが、之は一面、特に戰爭の淘汰的死亡に襲はれ易き地位に置かれたる人々の肉體的性質を調べることに依つて、一面又た、此淘汰に依つて生ずる實際上の結果を調べることに依つて定まる問題である。

歐洲諸國の軍隊は、總て肉體的發達に於いて一定の標準に到達し得た人々より成る

ものでゝ、此標準は無論さう高くはないであらうが、然し徴兵制度の實施されて居る國に於いては、身體に缺點のあるため此標準にすら達することが出來ずして徴兵免除となる者が隨分澤山ある。獨佛兩國に於いては、自長不足、體格不良等に依つて徴兵檢査に落第するものが三割乃至五割に上ると云ふ。一九一一年、英蘭、スコツトランド及びヱールスに於いて兵役を志願せる六萬四千の男子中、その四割五分即ち二萬八千八百は規定の標準に達しなかつた。之等の事實に依つて我々は、病死と戰死とを問はず、凡て戰爭のために命を捨てる所の將卒は、從軍せざる同年齡の男子に比し身體の發達に於いて一般に卓越者であることを知る。尚ほ大戰爭に於いて斃れる將卒の數の大なることは、別に冗々しく說明する迄もなからう。

戰爭が國民の身體に與へる實際上の結果に就いては、佛國政府の徴兵記錄に依つて之を確めることが出來る。佛國政府は前世紀の初めから引續き此記錄を保存して

居る。此の記錄に依ると佛國人の平均身長は一八一三年前後に於いて著しく減退した傾がある。この事實の根本の原因が彼の奈翁戰爭にあることは言ふまでもない。其證據には、奈翁戰爭の終熄後出生した男子は、身長に於いて平均一吋以上伸びてゐる。身長の變遷は又た同時に國民的元氣の變遷であつた。國民的元氣の變遷を立證することは身長の場合ほど容易ではないが、然し之が佛蘭西國民の健康に對して與へた影響は、身長の場合よりも更らに一層永續的であつた。

戰爭の損失よりも遙かに大いのは、或る程度まで豫防し得る原因に依つて釀される嬰兒死亡である。嬰兒死亡の淘汰力に就いては從來さまざまの說が提出されたが、然し之に對する確實な證據は今日の所まだ殆ど發見されてゐない。スノー氏は此問題に就いて一個の精密なる統計的研究を行つた。同氏は其結果として、幼少時に死亡する兒童は一般に最も虛弱な兒童であると云ふ結論に到達した。然し、スノー氏

の此結論は到底まだ十分に實證せられたる不動の事實として承認することは出來ぬ。又た假令夫が承認されたにしても、かるが故に嬰兒死亡は人類の發達に有利なりと斷言するは早計である。何となれば、嬰兒死亡を招致する原因は、死亡せざる兒童に迄惡影響を及ぼし、延いては其原因の無き場合よりも一層不健康なる家族を現出せしむるに至るからである。

(三)淘汰的結婚率と雌雄淘汰

結婚率が出產率に影響することは言ふまでもない。然しながら問題は如何にして其影響が行はれるかにある。淘汰的結婚率の重要なる所以は、單に夫が出產率に影響するから許りでなく、寧ろ其影響し方である。淘汰的結婚率は雌雄淘汰に基く場合もあらうし、又た第一章に述べたる如く、婚姻を奬勵若しくば禁止する所の法律習慣等に基く場合もあらう。

近頃流行の婦人解放運動は、果して雌雄淘汰、結婚率、出產率等に何等か著しき影響を與へ得るであらうか。私は之を肯定するに足る理由は十分にあると信ずる。元來、婦人解放運動の起原は、一部分は確かに、婦人の數が男子の數よりも多いと云ふ事情から來て居るので、單に此事情だけでも雌雄淘汰の受けた影響は決して少くはない。何となれば、此事情に依つて結婚の選擇權は女子の手から男子の手に移されたからである。婦人解放運動は又た、女子高等教育の普及を奬勵した。其結果として、最も有爲なる女子の間に出產率の減退が釀された。

第八章　人種改造學的政策

從來、人種改造學は積極的方面と消極的方面とに分けられてゐた。そして積極的人種改造學は肉體的、精神的及び道德的性質に於いて生れつき平準以上に卓出せる

個人の增殖を目的とし、消極的人種改造學は之等の性質に於いて劣等なる個人を生ぜしめるやうな種族の增殖防止を目的とするものと解されてゐた。然し、此分類には多少の非難がある。第一に、普通消極的政策と見做されて居るものゝ中には、當然に積極的部類に加へられてゐる政策よりも實質上遙かに積極的なるものがある。第二に、從來人種改造學的政策として提出されたものゝ中には、事實上非常に有益でゐて、而も積極的とも消極的ともつかぬものがある。例へば、性的衞生の教育や、結婚上、生殖上の健全なる理想を宣傳することなどは一見如何にも消極的部類に屬するものゝ如く思はれるが、然し之等の政策は又た一面に於いて、出來得る限り多く善良の子孫を造り、出來得る限り少なく不良の子孫を產ることを目的とするので、此意味に於いては矢張り一種の積極的政策である。

由來、人種改造學的政策の目的は、子孫の人種的性質を改善若しくば毀損する所

の各種の働因に一個の社會的統御を附與することにある。故に私は、此の人種改造學的政策の考察に於いては、成るべく右の如き曖昧な分類を避け、專ら此の社會的統御の實施法を標準として各種の政策を分類しやうと思ふ。

(一)婚姻法及び婚姻習慣

斯くの如き分類に於いて、先づ第一に來るは婚姻法及び婚姻習慣である。我々は時として次の如き反對論に出くわすことがある。人種改造學の理想は只だ婚姻上の制限を厲行することに依りてのみ之を實現することが出來る。然るに斯樣な制限は事實上全く不可能である。もし又た不可能でないにしても決して夫は望ましきことではない、何故と云ふに、斯くの如き制限を厲行する結果、其厲行に依つて防止せらるべき弊害よりも更らに一層惡しき弊害が釀成されるから。私は之に對して更らに次の反對論を提出したい。第一は、結婚上の制限は必しも人種改造學的政策の

必然的部分でないと云ふこと、第二は、斯くの如き制限は何等の軋轢を釀さず容易に之を厲行することが出來、又た事實上その樣に厲行されて來たと云ふこと。フランシス・ガルトンは一九〇五年、社會學協會の席上にて此問題に關する一篇の論文を朗讀した。彼は自由結婚を妨げる所の幾多の法律及習慣を評論した。彼は先づ一夫一婦制に言及した。一夫一婦制は決して自然的本能に依つて課せられた制限ではない。その眞の起原は寧ろ社會的福祉の考察にある。現在一夫一婦制の行はれて居る國民の間には、此制度に反抗して事實上多妻主義に等しきことを行つてゐるものも無いではないが、然し大部分は皆な唯々として之に默從してゐる。

第二は內婚である『內婚、即ち絕對に一種族內若しくは一階級內のみにて結婚する所の習慣は、宗教上の裁可を受けたもので、又た法律の力に依つて世界の各地に厲行されてゐた』

內婚の反對の極端は外婚である。外婚は從來極めて廣く普及したもので、野蠻人の社會では今でも尙ほ旺に行はれてゐる。濠洲土人の結婚習慣は極めて複雜で又た極めて嚴重に厲行されて居る。彼等の社會に於いては近親間の結婚は固く禁じられて居る。宗教上の動機から任意に獨身を守るものも亦、屢々見受けられる。結婚上の之等の制限が從來總て守られて來たことが事實である以上、人種改造學的理想を包藏する人々の間に於いて、將來人類の改善を目的とする他の結婚制限を厲行することは決して不可能とは云へまい。

結婚法に就いては、私は一九一二年の人種改造學大會に寄せられたデープンポート氏の論文を紹介し度い。彼は結婚法を生物學的方面から觀て次の如く言つた。文明國では總て近親結婚を禁じて居るが、斯くの如き法律は社會が初め近親結婚に依つて種々なる不利益の結果を經驗せる爲めに起つたので、同胞間の結婚の結果とし

て不良な子女の造られる事實は今でも屢々現はれて來る。けれども比較的緣遠き親族關係、例へば一等從兄弟同志の間などに於いても矢張り、之が事實であるか何うかは疑はしい。歐洲各國では羅馬敎及び希臘敎の勢力を得てゐる國を除いては、總て皆な民法上この一等從兄弟間の結婚を許可してゐる。一二等從兄弟及び六等親迄の親族結婚を禁じて居るのは露西亞と希臘だけである。西班牙、墺太利では一等從兄弟間の結婚が禁ぜられてゐる。然し、露西亞でも、希臘でも、西班牙でも、墺太利でも、之等の親族關係の免除を受けることは左程六かしくない。亞米利加では大抵の州で一等從兄弟間の結婚を禁じてゐるが、事實上果してそれが法文通り屬行されて居るかは疑はしい。

宗敎的獨身主義の行はれて居る國を除いては、前記の制限法及び制限習慣は單に相手の選擇に對する制限であつて、決して結婚その者に對する制限ではない。隨つ

て、其峻嚴の度合も決して、宗敎的獨身主義の行はれて居る國ほどは甚しくないのであるが、然し中には又た結婚に一定の標準を定めて、此標準に達しないものには絕對に結婚を禁ずると云ふ法律を施行してゐる所もある。例へば、或る野蠻人部落では、妻を扶助する資格なき男子は絕對に結婚を禁ぜられてゐる。但し此資格の標準は部落に依つて區々である。ベンチユアナ及びケーフアー種族では一頭の犀を屠ると云ふことが結婚資格の標準となつてゐる。ボルネオのダイク種族及びマレイ群島の土人部落では、敵部落の土人を殺して其首を幾個か搔取つて來なくては結婚の資格が附かぬ。斯樣な思想は幾分か文明國にも認められる。例へば、亞米利加のデラヱーア州では、窮困者は總て結婚が出來ぬことになつて居り、インディアナ州では五年間引きつゞき州立養育院に收容されて居た男子、若しくば現に其處に收容されて居る男子の結婚を嚴禁してゐる。

合衆國の大部分及び墺太利、瑞西等の諸國では白痴及び躁狂者の結婚を嚴禁して居るが、其理由は言ふまでもなく、白痴や躁狂者には確實なる契約をする能力がないと云ふことになる。ワシントン州では更らに一歩を進めて、『一般の酒漢、常習犯罪人、瘋癲患者、痴呆患者、懶弱者、遺傳性躁狂患者、肺結核患者及び遺傳性花柳病患者』の結婚を禁じた。但し此法律の眞の目的が之等諸患者の子孫の增殖を防止するにあることは、此法律が四十五歳以上の婦人と結婚する場合を例外としたことに依つても分る。カンサス州の民法は、瘋癲患者、痴呆患者、懶弱者、躁狂患者等の結婚を禁止すると共に、更らに其追補として之等の疾病を有する未婚者との同棲を嚴禁した。然し之等の法律が畏して幾許の實績を擧げ得るかは疑問である。法律の力に依つて、痴呆患者、瘋癲患者の結婚を禁止し得ても、其結果として私通や賣淫が殖えれば何にもならぬ。

結婚當事者の一方が自己の精神上乃至肉體上の健康に關して、何か重要の事實を隱蔽する場合がある。斯る場合には當事者の他の一方に結婚の破棄權を附與するが至當である。現に法文を以て斯くの如き破棄權を認めて居る國もある。斯種の法律は、何人にも不當の苦痛を課することなく、寧ろ其不當の苦痛を防止する効力があるので、前記の諸禁制よりも人種改造學的には遙かに價値が多いのである。瑞西では、『當事者の一方が自己若しくば自己の子孫の健康を毀害する如き疾病を當事者の他方が隱蔽せることを發見したる場合には、』其の當事者は法律の力に依つて結婚を破棄することが出來る。ポルチユガル、ブラジルの兩國では、右の條件として疾病の外に尙ほ犯罪を加へて居る。

(二)性能削除法

性能削除は被術者の身體に害のない程度に止めねばならぬ。然し茲で一々其方法

を説明する餘地はない。私は只だ去勢が其方法の一部を成して居らぬことを斷つて置き度いのである。

或る場合に性能削除を許可し若しくは厲行する所の議案は、曾て合衆國八箇州の州會を通過した。今左に其八箇州の名及び其通過の年を列擧しやう。

インジアナ	一九〇七
ワシントン	一九〇九
カリフオルニア	一九〇九
コンネチカツト	一九〇九
ネバダ	一九一一
アイオワ	一九一一
ニユーゼルセイ	一九一一

ニユーヨーク　一九一二

然し現に此法律を實施してゐるのは、カリフオルニア、インジアナの兩州のみであつて、他の六州は今尙ほ其實施を見合せてゐる。夫は、斯くの如き法律を州獨立で施行するのは合衆國の憲法に牴觸すると云ふ議論が起つた爲めである。

インジアナ州では三名の外科醫を委員に定め、『彼等の見計ひで精神的にも肉體的にも到底改善の見込なしと思はるゝ人々』を養育院その他から選び、夫等の人々に就いて手術を行はしめた。斯くの如くにして、一九〇七及び一九〇八の兩年間に百二十五回の手術が執行された。然るに、一九〇九年一月新たに同州の知事に選出された人が極力之に反對したので、爾後この事業は全く頓挫して了つた。

カリフオルニア州では、州立躁狂病院及び痴呆養育院の收容患者、及び殺傷罪、色情犯等の罪を犯して州立監獄に入監されてゐる數名の囚徒に就いて手術を行つ

た。元來、インジアナ州で右の法律を實施した動機は、全く人種改造學的であつたが、カリフオリニア州では人類種族全體の改善よりも寧ろ、被術者の肉體的・精神的、道德的改善を目的とした。故にカリフオルニア州の手術委員は一個の强制權を附與されて居つたに拘はらず、彼等は出來得る限り其强制權の行使を避けやうとした。手術を行ふ場合には、前以て被術者の兩親の承諾書を得ることが常であつた。被術者が精神的に幾分か健全の者である場合には、其被術者當人の確答を待つて手術に取掛ることもあつた。斯樣にして手術された患者は一九一〇年以來實に二百二十名（內九十四名は婦人）に上つた。

合衆國に斯くの如き法律が制定されたのは、決して一般國民が夫を要求した爲めではない。一般國民は寧ろ斯樣な問題には、至つて冷淡の方であつた。只だ、極く小部分の人々が熱心に其必要を主張したので、遂に兎もかくイ、カ二州に於いては

右述ぶる如く此法律が實施されることになつたのである。

性能削除法案が提出された時、某州の議員は熱心に之に反對して云つた。『斯くの如き法律の制定に依つて、國家の司法權は全く其根柢を覆へされて了ふ。性能削除は一個の刑罰である。法廷の外に於いて科せられる刑罰である。』然し前にも云ふ如く、豫め被術者の兩親の承諾書を得た上で、若しくは被術者自身の確答を待つて後に手術を行ふと云ふことになれば、夫は決して嚴密の意義に於いて刑罰とは云へぬ。被術者は只だ自己の性能を失墜すると云ふことの外には別に何等の苦痛も困難も感じないのである。私は一例としてカリフオルニア州の性能削除委員がボストン州立病院の某收容患者に就いて與へた報告を紹介しやう。

『H患者。四十二歲。愛蘭生れ。渡米以前曾て某躁狂病院に收容されたことあり。身體壯健。性癖佳良。運送人夫として一週十弗を得るの能力あり。患者の妻は

體格の點に於いて患者よりも一層劣等なれど、性質は至つて善良の方にして秩序あり、又た清潔を好む。八名の子女を生みし經驗あり。その中四名は何れも三歳に滿たずして死し、三名は懶弱、現に生存せるは只だ一名のみにして、此一名のみ人並みなりき。……係り醫師が手術を申出たる時、患者は極力之に反對したり。依つて先づ患者の妻を招きて手術の執行を納得せしめ、更らに彼女と係り醫師と患者との會談あり。患者は遂に手術を承諾したり。かくて手術は首尾よく執行せられ、患者は退院を許されたり。』

若し此患者が右の如き手術を受けず、將來更らに幾人かの懶弱者を造ると云ふことになれば、夫は啻に國家全體の不利益であるのみならず、患者の一家にとつても亦非常な苦痛であるに相違ない。我々は勿論未だ遺傳の法則に就いては多くを知らぬ。然しながら、我々が夫れに就いて現に有するだけの知識を以てしても、斯くの

如き性能削除の方法が確かに一個の價値ある人種改造學的政策であることは十分に保證し得る。

人種改造學（畢）

大正四年十月七日印刷
大正四年十月二十日發行

新知識叢書
第八編
人種改造學奥附
【定價金二十錢】

著者　高島素之

發行者　東京市麹町區有樂町一丁目四番地
野依秀一

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地
荻原勝次郎

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
博文館印刷所

不許複製

發行所　東京市麹町區有樂町一丁目四番地
振替口座東京三四三三番
電話本局四五一五、四五一六番
實業之世界社

世界社發行圖書目錄

大宇宙の神秘を闡く鑰

文學博士……三宅雪嶺先生著
青柳有美先生解說

■縮刷■
宇宙
■近刊■

■定價一圓五十錢■郵稅八錢
■ポケット型箱入美本■七百頁

『宇宙』は前に三宅博士が政教社から出版せられた書である。現代第一の碩學三宅先生が一代の哲學　系統を立てられたもので、日本の學者にして自己の哲學を組織せるは先生を措いて外にない。その思想の高遠深邃、從つて其文字を讀んで其の意義を知るに難く、初版千部再版千部三版千部を發行せる後、先生日本人にして此の書を解するは三千も猶多しとして斷然絕版せられたので今古本の價は原定價以上になつてゐる。青柳有美氏は博學宏識の人。今本社、先生に乞うて氏をして之を平易暢達、萬人に解し易きものとし、玆に絕版に依りて知識慾を制せられ滿天下の人士に原定價の半額を以て提供することゝした。

叢書類中の最高權威

新知識叢書

■毎月二冊以上發行■定價廿錢■郵稅二錢■

□第一編　物質非不滅論……大杉　柔譯
□第二編　獨逸工業の發達……永代靜雄譯
□第三編　科學の根柢……小原愼三譯
□第四編　婦人參政權運動……福永挽歌譯
□第五編　飛行機の進步……仲木貞一著
□第六編　島國及び島國人……西村二郎譯
□第七編　人種改造學……高畠素之譯
□第八編　生命の起源……佐藤綠葉譯
□第九編　實驗天才製造法……西村二郎譯
□第十編　最近科學の進步……青柳有美編
□第十一編　神經病精神的療法……福永挽歌譯
□第十二編　人類の祖先……小野秀雄譯

二十世紀の一大名著

世の中

箱入六百九十頁■定價一圓廿錢■郵稅八錢

文學博士　雪嶺三宅雄二郎先生著

學東西に亙り、識古今を貫き、人格亦一代に高き雪嶺三宅博士が、其圓滿剴切なる敎訓に、輕妙的確なる例證を引き、神機自在の筆致を以て、一代常識敎を物せられたるもの、卽ち此の『世の中』にして、人之を呼んで現代の論語、或は聖書と稱し、堪らなく面白くて獨特の敎訓を與ふるが故に發刊後一歲餘にして既に四十七版を重ぬ。以て其眞價を想見すべく、本書を讀まずして世の中を渡らんとするは、猶ほ船なくして大洋を渡らんとするが如し。

縮刷出來＝第四十七版

若宮卯之助先生著

若宮論集

□定價一圓廿錢□郵稅八錢□

各般の科學に於いて歐洲各國に一響を輸してゐた米國は、社會學に於てはウォード先生を出して、譽れを世界に揚げた。著者は米國に遊ぶこと十三年、親しくウォード先生に就いて社會學を修め、歸朝後その深奧なる思想を發表して漸く識者の間に知られて來た。しかし曲學阿世の學者の多き國にあつては、著者の言議は兎角繼兒扱ひにされ、未だ廣く一般に重く致されないが、少くとも社會學に於ては日本で著者の右に出づるものがない。本書は著者が、政治、人物、文明、社會、思潮等に關する、獨立獨步の評論が蒐めてある。個性の認められざる學者の愚說に飽きたるものは本書によつて渴を醫するを得る。

豈辯を好まんや

□定價金六十錢□郵稅金八錢□

『大阪毎日新聞』曰く

著者は在米十三年、其間華盛頓の圖書館に滿三年通つて、一日も缺さず勉强したりとて、大に米人を驚かした篤學者で、本書は其の蘊蓄の端を開いて平凡化せる我が學界、政界、外交界、並に社會等に對して、痛快剴切なる批評を下せる論文數十篇を蒐めたるものである。識見時流に超越して、鋭利なる觀察と剽鋭なる文章とを以て時弊を指摘し、殊に曲學阿世の學徒に對して深刻なる警策を下せる所などは、實に溜飲が一時に下がるやうな書振である。

日本文壇不朽の名作集

現代文集

菊版千餘頁■定價一圓九十錢■郵税十二錢

小說、脚本、評論、研究、隨筆、詩歌

執筆八十一名家

◉夏目漱石◉北原白秋◉正宗白鳥◉昇曙夢◉大町桂月◉長田秀雄◉長田幹彦◉平田禿木◉青柳有美◉岡本綺堂◉鈴木三重吉◉岡田八千代◉小宮豐隆◉中澤臨川◉よさのひろし◉與謝野晶子◉蒲原有明◉高安月郊◉成瀨無極◉秋田雨雀◉和田垣謙三◉野口米次郎◉高須芳次郎◉野上臼川◉野上彌生子◉前田晁◉若月紫蘭◉柴田勝衛◉戸張孤雁◉小野賢一郎◉栗原古城◉田中貞太郎◉沼波瓊音◉佐藤春夫◉石井柏亭◉廣瀨哲士◉小川未明◉茅野蕭々◉長谷川天溪◉西村渚山◉加能作次郎◉阿部幹三◉川合貞一◉内田魯庵◉野依秀一◉西本翠陰◉松居駿河町人◉上司小剣◉仲田勝之助◉小山内薰◉中村星湖◉生方敏郎◉佐藤緑葉◉相馬御風◉福永挽歌◉伊原青々園◉長谷川時雨◉安成二郎◉吉井勇◉久保田万太郎◉森田草平◉仲木貞一◉森下岩太郎◉奥川夢郎◉田中萃一郎◉中村古峽◉堺利彦◉守田有秋◉らいてう◉長尾素枝◉田山花袋◉德永保之助◉伊藤野枝◉德田秋聲◉村俊子◉浩々歌客◉眞山青果◉片山伸◉生田長江◉和氣律次郎◉安成貞雄……

宛として百花の一時に咲けるが如し

▼……實業之世界主筆……青柳有美先生著……▲

有美式

【定價金九十錢■郵税金八錢】

著者は篤學博識の人、而も書齋裡の隱遁者に非ず、机上の空論家に非ず、世上のあらゆる辛酸苦悶を經驗せる苦勞人である。著者の一言一行は世の常の學者のそれと異り、悉く人間味に富んだものである。從つて青年が安心して此の著者の言爲に從ひ得べきである。

美と女と

【定價金一圓廿錢■郵税金八錢】

著者は常に女に關する多くの論文を發表して、これがいつも世間の注意を喚び起すので、世間では青柳有美といへば、色狂ひか何かのやうに思つてゐる。しかし事實は之れに反して著者程眞面目な學者はない。その近著『女の話』の如きを見ても、女に關する研究の行き屆いて精細を極めてゐること、實に驚嘆に値ひするものがある。著者は單り女の研究家として知られてゐるのみではない。その美術に關する造詣の深き、文藝に對する識見の高き文學者間にあつて獨り光彩を放つてゐる。本書は著者の美術、文藝、女に關する古今獨歩の批評觀察を披瀝したもので、世に後れざらんとするもの、必ず讀まざるべからざる進歩した議論である。

長崎高商教授 田崎仁義氏譯

原始的民族の秘密講

今日行はるゝ風習のうちに一見不合理なる風習がある。その風習の起原を知らんとすれば、原始的民族の如何なるかを知るべきである。エチ、ウェブスター氏の「原始的民族の秘密講政治宗教の起源の研究」は世界の權威である譯者田崎氏は東京高商が出せる青年學者である。今や古神道の研究漸く盛んなる時本譯書の出たるは實に學界の一大慶事とすべきである。

定價一圓廿錢 郵税八錢 四六版美本 四百三十五頁

新歸朝者權藤林藏先生著

奇聞珍話 南洋土人の話

著者はカルカッタ大學に遊び後南洋に於いて繰觚の業に從ふこと十年に及び具に土人の生活、風俗、慣習等を視察された人で本書は卽ち其の視察錄であるが野智蒙昧なる土人の奇習珍風は到底文明人の窺知するを許さぬものがある。其の滑稽さには人をして抱腹せしめ絶倒せしむるものあると同時に、南洋渡航者の是非知らざるべからざる事である。

定價五十錢 郵税四錢 四六版美本 二百二十二頁

るたれ剝引を皮のけば

三版 好評

女の話

女主世界の筆 青柳有美先生著

女とは如何なるものぞ？女と交際せんとするもの、女を得んとするもの、女を敎へんとするものは、先づ此の問題を解かざるべからず。『女の話』を讀まずして女に對するは大間違ひなりといふべし。

本書內容

▲男女學生交際論▲處女の定義▲女は陽性なり▲女學校卒業生への注文▲男の好む女▲女の悅ぶ男▲女は秘密を守る▲女子や▲結婚と女性研究▲男女ケンカ▲女子罵倒論▲男子操縱術▲男の心を動かす法▲女子操縱術▲戀は行き當りバッタリ也▲美人を娶れ▲骨肉は何故に婚せぬか▲戀と虛榮心との關係▲新婚旅行奬勵論▲貴婦人よ低級なれ▲藝妓を輕視する勿れ▲名古屋藝妓罵倒論▲名古屋種が東京に跋扈する因緣▲新しい女の正體▲挑戰的女子の末路▲挑戰的女子の自慢▲戀死美人論▲貞奴と桃介▲問題の紅吉▲初戀三人女▲僕の細君▲佛蘭西をんな▲伊太利をんな▲西班牙をんな▲獨逸をんな▲英國をんな▲亞米利加をんな▲露墺白塞をんな▲抱月夫人に與ふ▲丹いれ子に與ふ▲女優排斥論▲秋田女▲女子の文藝中毒

箱入四百頁 定價一圓廿錢 郵税八錢

小柳津勝五郎翁著・小柳津小補氏増補

二倍收穫天理農法

増補改版

■定價金一圓廿錢■郵税金八錢■

此の本をよく讀んで實行すれば、米でも、麥でも、粟でも、大根でも、豆でも、牛蒡でも、野菜でも、サテは果物一切の農作物は今までの二倍以上とれることは確實であるのだから。と云ふ餘りウマイ話としてあるかを讀んで、實行される。

信じない人が、併し此の方法を實行して成功も知れぬが、のせぬ者は一人もない。

為め不景氣を歎ずるの人々は須らく本書

幸田博士・大木伯爵・杉浦重剛先生序・本社編纂

天理農法燻炭栽培

■定價金一圓■郵税金十二錢■

本書は天理農法に熟達せる、諸大家廿四名士が熱血を絞りて其實行の極意を説いたもの。『二倍收獲天理農法』及び『天理農法實驗談』を合せて斯法の三寶典となす。

▲實業之世界社編 三井と三菱 郵税十二錢 定價一圓六十錢

▲野依秀一著 快氣焔 郵税二十錢 定價二十錢

▲青柳有美著 不老不死 郵税八一圓 定價八一圓

▲野依秀一著 野依式處生法 郵税四十錢 定價三十錢

▲野依秀一著(三版) 短刀直入錄 郵税二十五錢 定價二十五錢

▲池田藤四郎君著 無益の手數を省く祕訣 郵税二十錢 定價二十錢

▲野依秀一著(五版) 傍若無人論 郵税二十錢 定價二十錢

▲池田藤四郎君著 三百萬圓改革物語 郵税二十錢 定價二十錢

▲野依秀一編著 東電筆誅錄 郵税八十錢 定價一圓八十錢

▲青柳有美著 戀愛の話 郵税八十五錢 定價九十五錢

▲田村俊子女史著 戀のいのち 郵税六十五錢 定價七十五錢

▲大木伯爵著 男兒の意氣 郵税六十錢 定價一圓二十錢

▲青柳有美著 無痛安產法 郵税六十錢 定價五十錢

▲青柳有美著 最新結婚學 郵税六十錢 定價五十錢

▲匿名代議士著 歐州强國議會傍聽記 郵税六十錢 定價四十錢

▲十八名士の觀たる 學問及職業の撰擇 郵税四十五錢 定價三十五錢

▲福澤桃介君著 桃介式 郵税四十錢 定價五十錢

▲馬場勝彌君口譯 西洋頓智集 郵税四十錢 定價三十五錢

▲田川大吉郎君著 都の机より 郵税八十錢 定價一圓二十錢

▲北山米吉著 新聞記事揑造の魂膽 郵税四十錢 定價五十錢

▲安達元之助君著 應用群衆心理 郵税四十錢 定價六十錢

▲池田藤四郎君著 モンテゾリー女史新式兒童完全教育法 郵税六十錢 定價五十錢

35
249

實業之世界社發行三大雜誌

實業之世界

本誌は我が國唯一の實業雜誌にして言論界に最大の權威を有す、本誌が奮鬪努力主義を唱道し常に實業界の改善に努力しは既に來りしは記事は實業家の認むる處世の清新にして缺くべからざる座右もの、みなり、澁澤男爵、三宅幸田兩博士の金玉の文字毎號掲載せらる。

毎月一日
十五日發行
定價金十一錢
送料一錢

世の中

本誌は世の中の一切のことを說く雜誌なり。即ち本誌の一卷は世の中の縮寫圖パノラマにして、多數の記者が手數と費用とを度外視して多方面に互つて收拾せる一粒よりの興味頗る深く、處世上の活顧問たるべき記事を掲ぐ。本誌は實に處世の羅針盤なり。

毎月一日發行
定價
郵稅
二十八錢

女の世界

在來婦人雜誌の幇間的、御氣嫌とり的態度を排して、忌憚なく婦人に對し警告し鞭韃し其眞底には溫き同情の念を持てるものは本誌より他に無し。記事は興味津々として盡きざるも多くは高尚なるも下品なるものも然かぶらず能く其中間を通れる良雜誌なり。

毎月一日發行
定價
郵稅
廿二錢

終